

## 井上哲次郎日記 一八九〇—一九二

## 『懷中雜記』第二冊

福井純子

ここに紹介するのは、東京都立中央図書館井上文庫所蔵の『懷中雜記』全二冊のうち、第二冊である。『懷中日記』第一冊は『東京大  
学史紀要』第十一号に翻刻した。なお翻刻に際しての凡例は以下の  
通りである。

## 凡例

- 1 原文では略字、俗字、正字等が多く用いられているが、常用漢字に直した。
- 2 合字、変体仮名はカタカナに改めた。
- 3 読点、カギカッコ、傍点、傍線は原文の通りである。挿入は○で示した。加点がある場合にはその部分を\*で示した。
- 4 原文に抹消がある場合には、左傍にくくをつけ、右傍に書き改められた文字を記した。抹消された文字が判読できない場合にはその字数を推定して■で埋めた。
- 5 史料の本文以外の部分は「」をつけて区別し、（ ）で傍注を加えた。また誤字、脱字についても右傍に（ ）を付した。

(金紙)  
『懷中雜記 第二冊』

(内装紙)  
『懷中雜記 二』

時事要録 「」

## 懷中雜記第二冊

○明治二十三年庚寅一月一日、千賀鶴太郎来訪、○二日、博多甘城両所に書状を送る、「此日伊勢時雄出發向日本」、○三日、中島力造来訪、○五日、中島氏と共にハルトマン・プフライドレル二氏を訪ふ、○六日、東語学校開講、○七日、德國皇太老皇后アウグスタ―氏崩御セラル、享年七十九歳、○十一日、中島氏英國に向て出發す、此日、英國東語学校 (School for oriental Studies) 開設す、○十三日、塩原多助一代記を讀了す、○十八日、久保田寺田、及木村三氏来訪す、「Hufeland's Makrobiotik」を讀了す、○十九日、セペレル氏に招燕せらる、○二十日、Max Nordau,

Die Konventionellen Lügen Der Kulturmenschheitを讀す、○二十八日、金子、日高、プフライドレル三氏并に文部省、帝国大学に書状を送る、

○二月四日、应当氏出發向「日本」、「Falckenberg, Über Die Gegenüberstehen Logic Der Deutschen Philosophieを讀了する」セペレルブリル二氏に書状を送る、「広東の楊椒坪に詩を寄す、云く、見説添茅老、家風出議郎、裁詩贈猿鶴、ト築近郊塘、山岸凝南雪、松花落古香、此間足幽賞、何日泊游航、」此頃、金天氏寄一詩述感慨、云く、危峰奔瀨、自然管、要害堪防、十万兵、殘墨秋高山、一角、霜風吹尽、古城、蓋し徳列典近傍の作なり、即ち其韵を歩して一詩を送る、云く、奇才為國事、經營、胸裏万千藏、利兵、仏水独山游跡、遍、激昂、吊古過殘城、○五日、井上円了氏に書状を送る、○八日、婦人セペレル氏に招燕せらる、○十四日、榎本、文部大臣并ニ中川會計局長代理及ビ浜尾辻二氏に書状を送る、「松林伯田演述安政三組益を讀了する、○十五日、支那哲學者性善惡論を書肆ブリル氏に送る、」田中の楽器を一覽す、○二十三日、嘉納田中二氏來訪、○二十六日、ハルトマン婦人に招燕せらる、往かず、○二十八日、ザハウ氏に招燕せらる、之を辞す、「太田齋藤二氏來訪」此日、Cicero, De officiisを讀了する、

○三月一日、日高氏ニ招燕せらる、久保田寺田田中嘉納村岡亦來会ス、○四日、東洋学校閉講、○五日、日高井上二氏に合照を送る、「マイエル氏に校合階を返す、○六日、久保田、フランツ二氏來訪、

○七日、プラウト、シュミット二氏來訪、「此日畢相に書状を送る、○八日、岡師崎氏來訪、「此日、チール氏に招燕せらる、蓋し其日本に赴くを以て留別の宴を開く也、○九日、Sauer's Italienische Grammatikを檢閲したる、」久保田寺田二氏を訪ふ、「夜、岡師崎氏に招燕せよ、」○十日、Im Bibliographischen Bureau, Altyamdorff 2に詣る、○十二日、三好退蔵氏來訪、○十三日、野尻氏來訪、○十四日、スタインシュナイドル氏來訪、「夜、桂藩二氏と共に冬園に詣る、○二十一日、Mendel, der Hypnotismusを讀了す、」寺田久保田二氏を訪ふ、○二十四日、多湖氏來訪、「此日、Schopenhauer's Parerga u. Paralipomena, Bd. 1を讀了す、○二十八日、西園寺侯に招燕せらる、○二十九日、大和会に至る、○三十一日、里昂銀行に書状を送る、

○四月一日、黒田多湖シュミット三氏に書状を送る、「潘飛声と共に千賀氏を訪ふ、○二日、黒田侯より五百円即独貨千五百七十五馬を領収す、「ザハウ氏を訪ふ」。奥野貞氏に収納証を送る、」陶架林來訪不遇、留書而去、云、久不握晤、渴夜為勞、聞諸竹蘭両先生、謂閣下近日殫心著述、欲成千秋不朽之業、甚盛事也、緒論若何可使陋人得聞一二、否、今夕月明如昼、不復得附驥尾作汗漫遊、可惜可帳、貴邦千賀先生弟不レ知其住址、求代致倦々、為幸、此請君勉先生著安、○五日、里昂府「スペシーバンク」ヨリ千五百五十九麻八十五布領収ス、即日領収書ヲ送ル、「ローゼ氏ニ書状ヲ送ル、」夜、村岡

氏留別会ニ出ツ、○七日、陸軍一等監督川口武定氏来訪ス、此夜、夢ニダルウイン氏ト談話ス、○八日、普国文部省ヨリ四百五十馬領収ス、久保田氏来訪、翻訳ヲ委託ス、○九日、ゼラルデー氏来ル、○十日、Bibliogr. Bur.ノ翻訳ヲ完了ス、<sup>ケルヒ</sup>氏ニ逢フ、○十一日、久保氏来訪、「ツアンチール姉妹ト散步ス、」モンチ女史ニ書状ヲ送ル、○十三日、シユミット氏ヨリ四十馬領収ス、大島、川口、福島、遠藤四氏ト共ニ会食ス、○十四日、ローゼ氏ニ書状ヲ送ル、○十五日、スタインシユナイダー氏に書状ヲ送ル、加納来訪、○十七日、Bibl. Inst. Dir. zu Leipzigヨリ十二馬領収ス、高橋健三氏ニ書状ヲ寄ス、ランゲ氏ヲ訪フ、加納氏ト共ニギズチキー氏ヲ訪フ、川口氏来訪、○二十日、ステーグリッツ村ニ遊ブ、マイエル氏ヨリ丁麻語ヲ学ブコトヲ始ム、○廿一日、東洋学校開講、○廿二日、久保田氏囑托ノ翻訳ヲ終ハル、○廿六日、Bibl. Bur.ヨリ五十馬ヲ領収ス、久保田氏ヨリ百馬ヲ領収ス、○廿九日、薩候氏ニ書ヲ寄セテ旅費ヲ請求ス、ローゼ氏ニ書状ヲ送ル、三十一日、シユミット氏ヨリ希臘語ヲ学修スルコトヲ始ム、

○五月二日、ローゼ氏ヨリ一五馬領収ス、高橋健三飯田旗郎来訪、○六日、三好氏ヨリ囑托セル書ヲグラマツキー氏ニ送ル、高橋氏出発ス、○九日、フフライドレル氏ニ招燕セラル、コーレルラツソン スツラツクス ハルトマン 諸氏亦来会ス、○十三日、Schopenhauer, Parerga u. Paralipomena 第一卷ヲ読了ス、○十七日、ハルトマン氏ニ招燕セラル、○十八日、三好氏ヲ訪フ、

○二十日、Kant, Kritik Der reinen Vernunftヲ読了ス、○二十五日、潘飛声寄書云、昨日由柏林駕車往薩克遜、即宿於山家、今早偕三生徒登山至小瑞士山、百石台望諸峯、皆虎劈、殊為海外奇境、又至瀑布、泉曲石山、則松風洗耳、心魂皆清、晚上巴蘭嶺、々最高、望奧國山、皆在其下、眼為之一開、明朝更擬趁、早涼往探奧國山川之勝也、客店草此奉告、○二十八日、飯田御世五郎氏寄書云、父飯田俊雄以明治廿年十月遠逝、有遺詩二首、故寄送、其一云、文明開化日新民、名教同游樂地春、仁者山兼知者水、三千里外意中人、其二云、多年螢雪競先鞭、看破哲書玄又玄、胸霧全晴無片翳、真如月照伯林人、○三十一日、西園寺公使来訪、暫時談話而去、

○六月三日、Tacitus, Annales 第一卷ヲ読了ス、○八日久保田氏出発ス、○十八日、大佐大島貞恭并潘飛声来訪ス、○二十八日、植物園ニ至ル、○廿九日、Trepowニ遊ブ、○三十日、布拉多氏ノ Apologia Socratis & Critoヲ読了ス、

○七月一日、グラスツキー并ニマンヘン二氏試験ヲ畢ル、「ツアンケルウルツ氏ニ書状ヲ送ル、○二日、ザハウ氏ニ書状ヲ送ル、○六日、Emilieト共ニパンコウ邸ニ遊ブ、○十四日、デモステネス氏演説一篇読了ス、○十七日、都築馨六氏ト共ニ談話ス、○十八日、グラマツキーマンヘン二氏再ビ試験ス、○十九日、朝グラマツキー氏来訪、夜、和独会ニ至ル、○二十日、Emilieト共ニグリユナウ邸ニ至ル、○二十一日、日本文部省ニ万国東洋学会

景況ニ就キ申報ヲ送ル、○二十四日、大島大佐来訪、○二十五日、Carl Madisonニ書状ヲ送ル、セネカ氏 De Consolatione ad Helvianeヲ読了ス、○二十六日、千賀、日高、加納、潘、桂、グラマツキ、マンヘン、フランツ、田中館九名ヲ招燕ス、桂氏有詩云、西海秋風起、東瀛客路長、送君無限意、我亦欲還郷、余未月亦異族絡方盛、男兒志自強、將返國亞洲正多事、好爲固苞桑、防禦之策、其二云、文章山井鼎、經學物祖徠、吾道真不負、斯遊事出詩經、防禦之策、其二云、文章山井鼎、經學物祖徠、吾道真不負、斯遊亦壯哉、劍騰龍氣上、書載蟹行回、君婦多、人材也、出、蜻洲富、期君作育材、授大學、君婦多、人材也、出、蜻洲日、送君行更先、漢陳愛、徐禮之才、徐來談、別出一標三年徐孺榻、許他人坐也、亦陳王開序、萬里祖生鞭、人日常恐祖生先我著鞭、謂切著言如祖生也遇合期雲水、風騷况海天、一杯柏林酒、相對各悽然、其二云、正論關邪教、文章第一流、旁書探寄象、按談海錄、狄鞞、裂眦睨潜虬、興亞親隣國、論才隘地球、乘槎此婦去、好作類林儔、夜、大和会ニ至リ、留別ノ為メ一場ノ演說ヲ為ス、○二十七日、夜、グラマツキ、マンヘンニ氏ニ招燕セラル、又演說ス、○二十九日、陶渠林ニ支那公使館ニ招燕セラル、張、姚、廣、桂、潘諸氏亦来会ス、姚氏有詩其一云云、我曾六載蛤洲住、不道逢君在海西、此別愀然何所憶、名山富士旧留題、其二云云、頻年興亞紆籌策、盟約休寒托画圖、太息長風送君去、歐洲此夕、客星狐、一夜、和独会ニ至ル、各々離盃ヲ举グ、○三十日、印度洋ヲ經テ婦朝スルコト決ス、アルトホフ氏ニ逢フ、中洲養父ニ書状ヲ寄ス、○三十一日、寓居ニテ離筵ヲ開ク、

婦人居レ多、  
○八月一日、東洋学校閉講、一夜、知己ノ人三十余人ヲ一酒店ニ招燕ス、三好退蔵詩アリ云ク、一水。英。山。踏。尽。婦。風。光。收。得。滿。征。衣。一。因。君。欲。レ。ト。海。東。地。月。色。花。香。更。發。揮。陶氏亦長篇ヲ朗読ス、其他諸氏或ハ歌ヒ或ハ吟ジ、興ヲ尽シテ帰ル、一此日、Vossische Zeitungニ通信スルコトヲ約ス、○二日、姚氏ニ招燕セラル、陶廣ニ氏亦来会ス、一ラフテル氏ニ書状ヲ送ル、ラインホルド、スポンハイメル田中館三氏ニ写真ヲ送ル、一老子道德経ヲ郷氏ニ返ス、○三日、密梨氏ト共ニピヘルスベルヒ邨ニ遊ブ、篠田湯本ニ氏来訪ス、○四日、井上円了氏ニ書状ヲ送ル、一普政府ヨリ四百馬領収ス、是レ月給以外之手当也、一夜、学士会ニ至ル、○五日、フランツ氏来ル、一日高氏送別ノ歌ヲ寄ス、一日本の本のためとおもへどなかくにわかれといへはおしくやはあらぬ、一此日、芳川加藤両氏ニ書状ヲ送ル、一夜、千賀氏ニ招燕セラル、氏送別ノ詩アリ、一其二云ク「胸中自有古人道、高举深思入神鳥、天下滔滔趁世潮、憑君欲返狂瀾倒」、其二云ク「心蓄経邦策万言、海東婦去別開別門、要伸鴻鶴凌霄志、遮莫雀声燕語喧」、○六日、ギズチキ、及ビガベレンツニ氏ヲ訪フ、千賀、プリル、ホンベルト、プロジェクト四氏ニ書状ヲ送ル、桂潘ニ氏ニ贈ス、○七日、ハルトマン、プフライドレルランゲ、アレント、ビュトネル等諸氏ニ写真ヲ送ル、一エンゲルブレヒトハルトマン、ギズチキニ氏ニ贈物、一第九回東洋学会々員トナル、一チエラー先生ヲ訪フ、一三好有森ニ氏来訪ス、○八日、グルーベ氏ヲ訪フ、又セペレル氏ヲ訪

フ、不在、密梨氏二扇子ヲ贈ル、四言ヲ書ス、云ク、「知<sub>レ</sub>汝<sub>レ</sub>幾<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>、離別<sub>レ</sub>匆々<sub>レ</sub>、握<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>語<sub>レ</sub>、情緒<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>窮<sub>レ</sub>」午後七時伯林城ヲ出發ス三好、吉川、有森、篠田、二宮、日高、田中館、久保、千賀諸氏并ニ清人桂林姚文棟、潘飛声、其外東洋学校生徒フンベルトベック、プロジツト等送來、○十日、午前八時<sub>（午後）</sub>ミラノ府ニ到着ス、路、スウイス山中ヲ經、左右湖水ヲ觀ル、会々曉瞰湖山ノ外ニ出ツ、風光絶佳、殆下模写シ難シ、此日、ミラノ府ノ「Duo mo 及」Galleria Vittorio Emanuele 并ニ市街ノ景況ヲ觀ル、○十一日、La Brera ニ往テ古今ノ名画ヲ觀ル、○十二日、San Maria delle Grazie ニ往テ有名ナルレオナルド、ダ、ヴェインチー<sub>(alt)</sub>氏ノ耶蘇晚餐ノ画ヲ觀ル、頗ル其技倆ニ推服ス、又「il teatro della scalla」ヲ觀ル、午後一時ミラノ府ヲ出發シ同六時ヴェニス府ニ到着、Albergo Orientale ト云ヘル旅館ニ宿ス、○十三日、案内者一人ヲ携ヘテ市中ノ宮殿寺院等ヲ見物ス、夜、Piazza di San Marco<sub>(alt)</sub>ニ遊ブ、○十四日、La Galleria ヲ觀、又リド島ニ遊ビ、男女ノ游水スル景況ヲ察ス、其間又市街ニ散步ス、此都府ハ頗ル繁華ヨテ最モ奇觀ヲ呈ス、○十五日、午前八時半、ウエネチア府ヲ出發シ、<sub>路ハバートウカラニシテ三ツ</sub>。正午、ポロニア府ニ到着ス、或ハ車ニ駕シ、或ハ步行シ、市中ノ景況ヲ觀、又大学ヲ見ル、是レ歐洲最古ノ大学ナリト云フ、○十六日、Accademia delle belle Arti ヲ一覽シ、十二時四十五分ポロニア府ヲ出發シ、四時半フロレンツ府ニ到着シ、市中ノ景況ヲ觀ル、○十七日、Galleria degli Uffizi & Galleria del Palazzo Pitti ヲ一覽シ、又馬車

ニ駕シテ市街一般ノ景況ヲ觀ル、○十八日、Accademia di belle Arti, il museo nazionale, Biblioteca Laurenziana V.C. ヲ一覽シ、又有名ナル Sagrestia nuova ヲ觀ル、○十九日、Duomo, Campanile, Battistero, Casa Buonarrotti ヲ一覽ス、午後四時半フロレンツ府ヲ出發シ、同日、十一時十分羅馬ニ到着ス、○二十日、Chiesa di S. Pietro et Capella Sistina ヲ一覽シ、尋テ又車ニ駕シテ市街一般ノ景況ヲ見ル、○二十一日、il Vaticano, ed il Palazzo colonna ヲ一覽ス、○二十二日、il vaticano, museo capitolino 等ヲ一覽ス、夜、日本全權公使徳川氏ニ招燕セラル、○二十三日、「サンヒエトロ」寺ノ「クボラ」ニ登ル、又 Monte Puciscio ニ散步ス、○二十四日、八時五分、羅馬府ヲ出發シ、午後一時三十五分ナポリ府ニ到着ス、即チ市街ニ散步シ、其景況如何ヲ察ス、○二十五日、ウエスヴィオ山ニ登ル、<sub>市街</sub>。案内者一人ヲ携ヘ、馬ニ乘リテ山ノ半腹ニ至ル、此ヨリ四人ノ丁人余ヲ椅子ニノセ絶頂ニ至ル、火口雷鳴ヲナシ、飛石雨ノ如ク、近クベカラズ、山ヲ降りテポムペイ府ノ故墟ヲ一覽ス、是レ真ニ奇觀ナリ、夜、大ニ疲羸ス、○二十六日、朝 il museo nazionale ヲ一覽ス、奇品珍物多ク、ポンペイ府ヨリ掘出シタル春画并ニ断簡零墨最モ奇觀ナリ、午後三時十分、ナポリ府ヲ出發シ、羅馬ヲ經テピサ府ニ向フ、○二十七日、午前五時、ピサ府ニ到着ス、即チ有名ナル傾斜塔ヲ一覽ス、物理家ガリレイ氏重力ヲ試験セシ所ナリ、又 il Duomo ニ入ル、此寺院ノ中央ニ大ナル「ランプ」アリ、是レ又ガリレイ氏ノ試験セシ所ニテ、此ニ由テ

遂二時計ノ發明アリト云フ、又 Battisteria, campo santo, Università等ヲ一覽ス、又ガリレイ氏ノ誕生セシ家ヲ訪フ、其結構頗ル粗野、及チ豪傑ノ陋巷卑屋ニ出ツルコトアルヲ想フ、○二十七日、午後十時五十五分、ヒサヲ出発ス、○二十八日、午前七時二十五分、トリノ府ニ到着ス、即チ市街ニ遊歩シ、市中ノ景況ヲ觀ル、午後 Supera 至ル、山高ク眺望極メテ桂、姑クアリテ雲蓬勃トシテ山麓ニ起リ、漸々山峯ヲ圍ミ、咫尺弁ジ難シ、晚景客舎ニ還ル、○二十九日、午後三時、トリノ府ヲ出発シ、同六時半ゼノア港ニ到着ス、即チ市街ニ出遊ス、夜、腹痛、暴瀉ヲ憂フ、○三十日、腹痛ノ為メ多クハ客窓ノ為メ安坐ス、○三十一日、桂藩二氏ヲ旅館ニ訪フ、

○九月一日、午後四時ゼノア港ヲ出発ス、舟ハ独国ノ「ネツ」ト云ヘルモノナリ、○三時作離別詩以贈蘭史云、奇才生嶺嶠、劍氣生光芒、名作過鑿齒、新詩出繡腸、三年同異域、一別又重洋、更願与君去、海東遊故郷、陶栗林又有離別詩、云、

井上君迪將取道墨洲回日本国、漫成五言古歌、聊以話別、用二十陌全韵、録請大方家正之、湖南 渠林陶森甲  
 我行海西頭。瀟瀟滄溟雁。中遇岐嶷士。豪氣何磊々。嘉名井上哲。明哲傾寮案。識高二峯。学富大平海。君所著異軒詩 妙中有此語手著異軒詩。蔚然發絢綵。洋々弁惑文。真扶耶蘇罪。君有耶蘇弁惑序晨鐘發深省。能学思不殆。來從三神山。六合窮章亥。言至普魯士。閱時七八載。蟹書綜衆長。君通英法德義及印度文字西土青眼待。延為國学

師。金台重郭隍。振興東方学。鞭策化鷲駝。三年擁翠比。分陰戒予怠。忽起蕞蠃思。鎮日手承頰。浩然賦歸去。夢伸尺八鞍。取道大西洋。掉頭俯仰頰。薄游米利堅。涉遠忘遐。瀕行就予別。高論喝成彩。珍重措臨岐。坐久不知餒。爰止而觴之。殺菽惟筍筴。兼味咄嗟難。魚肉嫌敗緩。捧觴為公寿。此意慙鄙猥。我有心腹言。芻蕘供樵采。方今五大洲。威力為主宰。欧米競機詐。交鄰肆欺給。樓船碧波橫。巨刃白羽雫。一發衝車礮。丸彈如散塊。小者破天飛。大者方鈞礪。轟城傾土牆。俘卒搏傀儡。有江失深險。有山失歸罪。剽悍鬼神驚。當之輒蒞臨。兵力強如彼。而又耽貨賄。環海拓市埔。放利求三倍。賈胡接踵來。兇焰騰髮髻。雄倖虬髯公。狡甚慕容庖。獨我亞細亞。積弱形腰。有如無枝木。拳曲露魁瘡。又如久病人。切膚起疔瘡。民風敦古処。夷腥若將浼。制器懲奇淫。長物余木樞。即戎何処恃。公矛並釜鍔。數為他族侵。頻披忍辱鎧。却運未易回。噉臍祗追悔。中華与日本。奇花初破蕾。同文證声教。同心攀蘭茝。渙汗風雷行。戈矛鍛厲乃。掃除谿谷煙。艾刈郊原倍。庶幾銷寇萌。迭奏將軍愷。凱舍旧而謀新。原田歌每々。母為同室鬪。旧盟不可改。唇亡則齒寒。深通言猶在。使君才不世。志節標魂々。苟出而凶君。智珠躍百珠。此行為蒼生。料匪下爽塏。東婦觀丹陛。塩梅調鼎鼎。無忘賤子言。星月照天璣。

○五日、エンゲルブレヒト婦人并ニ密梨女史ニ書状ヲ送ル、○潘

蘭史ノ詩二首ヲ得、云、我交東海多良友。文采風流似子稀。樓、檣、柏、林、分、手、日。豈期一舸更同歸。其三云、客邸重逢喜可知。行囊各出紀游詩。与君取足今宵醉。快意長風挂席時。○六日、午後十二時半ポルトサイド港ニ着ス、市中ノ景況ヲ觀ル、○七日、再ビ桂潘二氏ト共ニ市街ニ散步ス、○十日、船中偶賦二七絶一首。云、

舟衝彷彿水天間。又送又迎幾幾灣。篷底相逢共相喜。每經一日近家山。

和韵

潘蘭史

天外題詩蒼莽間。坐看紅海落前灣。鯨波万里魚龍靜。東望三神更有山。

又

桂竹君

鯨瀾出沒海中間。一日長風送幾灣。觴咏与君期有日。桂花時節在青山。謂香港太平山

○十一日、与暹羅人与乃那論東洋政策。此日暑甚。

○十三日、和韵贈潘君。其一云、足底歐羅。万里。眼中才似故人稀。飄然一舸來天上。喜說狂游海外歸。其二云、舟中把

筆有誰知。促膝聯吟元白詩。夜々与君傾酒坐。一痕明月照來時。又別賦五古一篇、書感云、立志游西域。学欲漱源泉。淹留經七載。探窮玄又玄。校舍逢碩学。僻邸訪隱賢。語兼二十国。学書說幾万編。東婦欲矯弊。卓志自堅。負劍踰三山嶽。長風吹上船。何圖百感集。篷窓或廢眠。往事總如夢。前途亦似煙。離合雖難避。可堪此變遷。美人異邦女。

天外杳何辺。東瀛多知己。惜哉少瓦全。壯圖何時遂。漢々故山天。半生如流水。忽過卅五年。萍蓬想異日。又応矢離弦。一瞬是我命。敢欲為國捐。此事不千人。何必求黃緣。捨家游跡遍。如土賤金錢。傲然說王侯。東洋当合連。我国尚孱弱。巨力要斡旋。所期与西域。駢鑣競後先。○十三日、午後三時、亞丁港ニ入ル、同日、八時出發ス、○二十一日午後八時、格電勃発ニ入ル、○二十二日午前八時出發ス、○二十六日、Ellendts-Seyffrat, Lat. Grammatik V. Dittfurt, Griche Yokabulariumヲ閱ス、○二十七日、日高千賀二氏二書状ヲ送ル、午後十時、新嘉府ニ到着ス、此夜是レ中秋、即チ桂潘二氏ト韵ヲ限リテ各々詩ヲ作ル、云ク、万里弘来西域塵。同舟欲返遠游人。新嘉府畔中秋夜。与子高吟東亞春。此時共吟日高東亞春、入港ノ時各種異様ノ支那人來集ス、潘氏云、我們亞細亞人狠奇怪的、蓋シ西洋文物ノ国ヨリ歸り來リ、忽然自己ノ同胞兄弟ヲ一見シ其陋習ニ驚クナリ、潘氏又云、中心術ノ狡確当有甚于西人者、惜其人各一心、不レ如西人ノ堅而成一大事也、其言当レリ、桂氏云ク、我中人ノ陋習如レ此、西人賤レ我、良有以哉、今日而改之、実為難矣、然亦不可不洗也、又云ク、我中人ノ陋習如レ此、則与亞非利加人ニ奚以折之、实是可耻之甚也、中人ノ變ニ西人ニ劣レル一見シテ知ルベシ、而我邦ノ腐儒輩今日尚ホ彼レヲ浮慕艶稱シテ已マザルガ如キハ笑フベク又隣ムベキコト也、王紫詮、黄吟梅、黄遵憲、沈文燧、陳雨農等ノ如キモノヲ尊崇ス、最モ忌ベキ事ナリ、○二十八日、暹羅人乃那

ト別ル、此人英徳兩語ニ通ス、故ニ、舟中共ニ東洋ノ政況政策ヲ論ス、此日、日本領事齋藤幹ヲ訪ヒ、約一時間談話ス、○二十九日、午前六時、船、港ヨリ出發ス、○三十日、海波平穩、

○十月三日、大風起リテ海波最不穩、○五日午前十時、香港ニ着ス、日本西山旅館ニ至ル、尋デ日本領事館ニ抵リ、宮川領事ニ逢フ、○六日、桂藩ニ氏ト別ル、午前十時半「ウエルダ」船ニテ日本ニ出發ス、○十三日、日本ニ着ス、即日文部省ニ至リ、辻新次ニ逢フ、尋デ大学ニ行キ和田垣讓三ニ逢フ、

婦朝以後の要件

第一 羅甸語

第二 希臘語、此三語ハ益々研究スベキ事

第三 梵語

○第四 国学ヲ研究スル事

○第五 支那官話ヲ学修スル事

○第六 日支哲学史脱稿スル事

第七 外交政略ヲ著ハス事

第八 新詩派ヲ開ク事

第九 如是我觀ヲ著ハス事

○第十 和漢ノ宗教ヲ講究スル事(仏教)

第十一 學術專攻協會ヲ興ス事

第十二 巽軒詩鈔ヲ増訂再版スル事

○

十月十四日、再び大学校ニ至リ、諸教授ニ逢フ、夜、哲学館諸子

ト松源ニ宴會ヲ催ス、○十五日、フロレンツ氏來訪、○十六日、フロレンツリースニ氏ニ逢フ、芳川顯正氏ヲ訪ヒ、談話時ヲ移ス、○十八日、森川町一番地ニ移転ス、此頃各新聞社員來訪、○十九日、フロレンツエツゲルトブツセ三氏ヲ訪フ、○二十一日、哲学館ヲ訪ヒ、国府寺新作氏ト王寺子ニ遊ブ、○二十二日、清人張滋昉ヲ訪ヒ、曾根俊虎氏ニ逢フ、尋デ浜尾新氏ヲ文部省ニ訪フ、井上四了氏來訪、○二十三日、雕像家大熊氏來訪、谷千城黒田長成ニ氏ヲ訪フ、文科大学教授ニ任ジ奏任四等ニ叙ジ、上級俸ヲ賜フ、○二十四日、中島力造内田周平ニ氏ヲ訪フ、夜、朝比奈氏ニ招燕セラル、金子末松宮崎井上藤田リース諸氏ニ逢フ、○二十五日、小柳津要人吉田良春來訪、絵入自由新聞ニ書状ヲ送ル、午後、金子堅太郎氏ヲ訪ヒ、談話時ヲ移ス、○二十六日、妻子博多ヲ出發ス、中村正直ヲ訪フ、○二十七日、服部一三氏ニ訪フ、中島力造氏來訪、○二十九日、訪伊藤伯ニ不在、○三十日、朝与伊藤伯ニ談話、自三八時ニ至一、夜、父母妻子來了、○三十一日、井上四了大熊氏廣諸氏來訪、

○十一月二日、伊藤長岡ニ氏來訪、○四日、羅馬字會ニ赴ク、外山矢田部穂積諸氏來會又仏人エブラール氏ニ逢フ、○五日、ボエフ氏ヲ訪フ、夜、独乙人ニ學會ニ赴ク、公使ホルレーベン氏ニ逢フ、○六日、芳川大臣ト談話ス、○七日、哲学館ニテ講義ヲ始ム、黒田直躬加藤熊一郎來訪、○八日、小林鉄之輔平出善吉來訪、「歴踐記」ヲ大学ニ寄ス、云ク、

明治十三年七月九日、東京大学ニ於テ哲学政治学卒業(文学士



ノ学位受領)

東京大学

明治十三年十月廿三日、御用掛申付候事取扱判任ニ準シ月俸金六拾円給与候事 文部省

同年同月同日 編輯局兼官立学務局可相勤事 同

明治十四年十月廿五日、専門学務局兼務申付候事

明治十五年三月四日、任東京大学助教 文部省

同年同月同日文学部勤務申付候事 同

同年同月同日年俸金七百廿円給与候事 同

明治十五年三月九日、東洋哲学史編輯兼囑托候事 東京大学

明治十五年七月廿四日、諮詢部会ノ会員ニ撰挙候事 東京大学

明治十五年十二月廿日、自今年年俸金八百四拾円給与候事 文部省

明治十七年二月十二日、依願免本官 文部省

同年同月同日、哲学為修行滿三箇年独逸国ニ留学申付候事 文部省

明治十七年二月十五日、独逸国留学中哲学科教規教則詳細取調之議ヲ囑託候事 東京大学

同年同月同日、独逸国留学中本学々事上取調之儀ヲ囑託為手当一ヶ年金貳百八拾円給与候事 同

明治二十年十月二日伯林東洋学校教授<sup>講師</sup>被仰付月俸賜三百麻克 普国政府

明治二十二年一月卅一日、万国東洋学会委員囑托被仰付 文部省

明治二十三年八月一日依願免本官 普国政府

同年同月四日、賞金千麻克下賜

同

明治二十三年十月十三日帰朝

同年同月廿三日、任文科大学教授

同年同月同日、叙奏任官四等

同年同月同日上級俸下賜

十日、大日本教育会々員トナル、文科大学ニテ講義ヲ始ム、一本松啓来訪、○十二日、書状ヲ博議社ニ送ル、○十五日、黒田長

成侯ニ招待セラレ、席上演説ヲナス、○十六日柴田幸俊一本松啓

ニ書状ヲ送ル、大橋盛一來訪、○十七日、大学ニテ開講演説ヲ

為ス、来聴者大約三百名、○十八日、Wilfrid Spinner 来訪、

久保田青木二氏ニ書状ヲ送ル、大学ノ会議ニ出ツ、津野慶太郎

来訪、○十九日、フロレンツ氏来訪、○二十日大同新聞社員佐野

龍次郎氏来訪、金子堅太郎氏ニ逢フ、○廿五日、国会々談、中

西牛郎氏著組織仏教論ヲ読ム、○廿六日、深沢伊三郎赤堀又次郎

中島力造元良由次郎来訪、哲学会ニテ性善惡論ヲ講ズ、○二十

七日堀井正則来訪、○二十九日、国会開院式、リース氏ニ招燕

セラル、○三十日、伏見宮ニ謁ス、千賀鶴太郎氏ヨリ来状、有

詩云、故国風光今若何。旧遊応続好山河。滝川楓葉墨川菽。鴻雁

來時發興多。

○十二月一日、養父母出発ス、市川雅飾来訪、○二日。柴田幸俊

ニ文ヲ返送ス、朝比奈知泉来訪、○三日、井上円了著仏教活論

序論ヲ読ム、津田津道、磯島健蔵二氏ニ書状ヲ送ル、物集高見

著日本文明史略三卷読了、○四日、国民之友ト云ヘル雑誌ノ編輯

員中村秀一、齋藤精輔龜井忠一来訪、「文部大臣ヲ訪フ」、「柳莊太郎村崎常治来訪、夜、十二時、中村徳山没ス享年七十四、〇六日、国府寺新作山本謙太郎来訪、「本郷教育会ニ演説ス。」一本松啓来訪、〇七日、熊本県人木野一雄安達謙蔵并ニ岡本監輔来訪、〇八日、堀内静宇来訪、〇九日、始メテ伏見宮殿下ノ前ニテ講義ス、花房義質以外三名傍聴ス、「朝比奈知泉ニ書状ヲ送ル」、「柴田幸俊ニ文ヲ返送ス、〇十日、佐野竜次郎久米幹文ニ氏来訪、〇十一日、下沢善兵衛神崎福次郎来訪、〇十二日、山崎哲蔵磯部武者五郎来訪、〇十三日、木内重四郎来訪、「伏見宮并ニ丹波敬三ニ書状ヲ送ル、〇十四日、深沢伊三郎来訪、「音羽護国寺ニ於テ仏教ノコトニ就キ演説ス桑田衡平、佐治美然、松本順乘、北条連慧、寺田福寿、加藤熊一郎亦来会、「途上斯波淳一郎、杉浦重剛ニ氏ニ逢フ」夜、外山正一ニ招燕セラル、中島力造、元良勇次郎、清野勉、三宅雄次郎等来会、〇十五日、深沢伊三郎来訪、金二十円貸与ス、〇十八日、哲学館講師会ニ出ツ、〇十九日、丹羽敬三、安部正也来訪、〇二十日、磯部武者五郎并ニ仏人ピオフ来訪、「此日、斯文学会ニ於テ欧洲ニ於ケル東洋学ト云ヘル題ニテ演説ス」次デ伏見宮殿下ニ講義ス、土方久元、花房義質亦来会ス、〇廿一日、内田周平ヲ訪フ、「柴田幸俊ニ書状ヲ送ル、〇廿四日、寺尾寿ニ書状ヲ出ス、佐野竜次郎齋藤精輔来訪、「小屋保治亦来訪、〇廿五日、田中竹森ニ女史ヲ招燕ス、〇廿六日、筑前学生会ニテ演説ス」公民協会ノ協参員トナル、〇廿八日、勅語解釈草稿成ル、〇卅日、片岡久太郎来訪、〇卅一日、竹森女史来訪、

1891 明治廿四年、一月一日、田中竹森ニ女史来訪、〇三日、水島慎次郎来訪、「弘太郎上京」柴田幸俊ニ書状ヲ送ル、〇九日、佐野氏来、〇十日、藤森佐吾吉、金太仁策、坂口崇一来訪、〇十一日、土岐幸宗村岡範為馳来訪、〇十七日、伏見宮ニ講義ス、鍋島直大、花房義質来会、〇十九日、大学講義室ニ於テ神道論ト題セル独語演説ヲナス、〇二十日、両議院焼失ス、「森林太郎ヲ訪フ」、「藤井宣正、金井延、柳生庸輔来訪、〇廿一日、演説筆記ヲ市川氏ニ送ル、〇二十二日、講義筆記ヲ伏見宮ニ寄ス、「又性善惡論ヲ小屋保治ニ寄ス、〇二十五日、張滋昉、高坂駒三郎、田中女史、繁野珠城来訪、〇二十六日、史学会々員トナル、〇和田垣謙三、金井延来訪、

〇二月三日、国家学会演説ヲナス、〇八日、厚生館ニ東西文化ノ差異ヲ論ス、〇十日、スピネル氏ノ送別会ニ列ス、〇十四日、華族同方会ニ演説ス、〇十八日、三条内大臣薨ス、〇二十一日、都築馨六ヲ訪フ、「関直彦氏ニ招燕セラル、金子堅太郎、菊池大麓、森林太郎来訪、〇二十七日、勅語衍義成ル、「森文部大臣ヲ訪フ、〇三月五日、「日本ノ学者ニ告グ」ト云フ文ヲ作り畢ル、「維摩経ヲ読了ス、〇六日、山田喜之助ニ招燕セラル、高橋健三、朝比奈、元田、岡松、石橋諸氏ニ逢フ、〇七日、中島力造、赤沼金三郎来訪、〇八日、芳川文部大臣ヲ訪フ、「石橋忍月来訪、「国会閉ツ、

〇十日、伏見宮ニ進講ス、鍋島花房諸氏傍聴、〇十三日、張滋昉、南条文雄、大手総彦、清野勉ヲ招燕ス、〇十六日、九鬼隆一ニ招燕セラル、齋藤桃次郎、木内重四郎、有賀長文等亦来会ス、〇廿

- 一日、大学通俗講談会ニテ「欧州哲学ノ近況ヲ演説ス、○廿二日、<sup>(編註)</sup>麟省院ニテ「内地雜居ノ結果如何」ヲ演説ス、○廿八日、伏見宮ニ進講ス、夜、上野松源ニテ同窓会ヲ催ス、
- 四月一日、東京図書館ニ至ル、○十八日、伏見宮ニ進講ス、○十九日、西本願寺仏教親睦会ニテ演説ス、○廿一日、始メテ黒田長成侯ニ進講ス、○廿五日、大日本教育会ニテ「美育論」ヲ演説ス、○二十九日、伏見宮ニ進講ス、
- 五月一日、植物園ニ小集、○五日、伏見宮ニ進講ス、高橋健三ニ招燕セラル、○六日、内地雜居統論ヲ出版ス、夜、開花樓ニテ岡本監輔ヲ送ル、○九日、神道本局ニ於テ「神道論」演説ス、
- 十日、日本美術会ニテ演説ス、○廿七日、小中村氏ノ寿筵ニ臨ム、○三十日、加藤総長來訪、
- 六月、六日、国民英学会ニテ「語学ノ必要」ヲ演説ス、○七日、中村正直卒ス、○十日、伏見宮ニ進講、土方、鍋島、花房諸氏來聴、○廿六日、小集ヲ催フス、高橋健三、岡倉覚三、嘉納治五郎、張滋昉ヲ招燕ス、○廿七日、鎌倉ニ赴ク、○廿八日、阪倉銀之助ノ葬式ニ赴ク、
- 七月四日、大木文部大臣ト談話ス、「黒田長成公ノ祝燕ニ赴ク、
- 七日、ドクトル、ライトネル氏ニ一磅送ル、南条文雄氏ノ為メナリ、
- 八月二十四日、文学博士ノ称号ヲ受ク、○磯部弥一郎氏來訪、○二十九日、学習院教授ノ囑托ヲ受ク、年俸三百円ナリ、○三十日、精養軒ニ於テ服部小川立花ノ三氏ヲ送別ス、

○九月一日、勅語衍義成ル、

○十月一日、大沼枕山卒ス、○十七日、菊池三溪若州ニ没ス、一月ノ中阿詩人ヲ失フ、惜ムベキナリ、

○十一月、十二日晚十時信子生ル、○十八日信子死ス、○廿六日国会開ク、

○十二月五日、中央会堂ニテ「王陽明ノ学ヲ論ズ」ト云フ題ニテ演説ス、○二十一日叙正七位、

○明治廿五年一月二日、賦詩云、人生若山蹊、迂余又曲折、雖爾迹茫茫、畢意唯一警、懷昔在故山、苦学守清節、案頭千卷書、寒夜読風雪、窓竹凄相磨、破荻柝声絶、思川水

応レ加、触レ岩波鳴咽、万事如昨宵、光陰同電掣、忽々廿余年、拮据幾蹉跌、今又逢新正、感慨一何切、尚雖有寸志、<sup>斯志</sup>身在中年列、大夢是生涯、一死知永訣、著書惜未成、細

心要巧綴、執筆独鉤深、鉛槧不暫輟、離俗理之尋、一笑看寥泚、○十日、張滋昉ノ招ニ応ジ、皆樂園ニ至ル、○十一

日、大学開講、○廿三日、斯文学会ニテ「漢詩和歌ノ將如何」ト云フ題ニテ演説ス、同日、大日本婦人教育会ニテ婦人ノ事ニ就

キ一場ノ演説ヲナス、

○二月七日、大倉喜八郎氏ニ招燕セラレ、席上演説ヲナス、來会者中榎本武揚、土方久元、芳川顯正、渋沢栄一、増田孝、等ノ諸氏

アリ、○十一日、日本新聞社ノ第三年回祝宴ニ招燕セラル、○十四日、大槻文彦來訪、○廿日、本郷西片町ヨリ小石川表町ニ移転

ス、○廿一日、青年文学会ノ為メ福田樓ニテ演説ス、○廿八日、

島田重礼、張滋昉、森鷗外、寺田福寿四氏ヲ招燕ス、

○三月九日、大学講義室ニ於テ英人バチエラー蝦夷人バラピタ諸氏ノ演説ヲ聴ク、尋イテ Asiatic Society 二行キ、芳賀及ビノックス氏ノ演説ニ就キ討論スル所アリ、○十日、養父大病ノ為メ、妻ト順吉ヲシテ帰省セシム、○十四日、黒田侯爵ノ懇話会ニ至ル、小沢中将、細川潤次郎、岡部長職、西園寺公望等来会、○十八日、重野安繹氏ニ招燕セラル、向山黄邨、久米邦武、坪井九馬三、寺田弘来会ス、黄邨有レ詩、云ク、

長檠八尺満堂紅、美酒三杯大道通、今旧不論聴夜雨、雌雄無前坐春風、談天郷衍口難黙、作賦相如才豈窮、多謝与君纔一晤、勝於独学十年功、

二十五日、英人 Edmund Buckley 来訪、○廿六日、木造家一棟ヲ買フコトニ定マル、○廿七日、松風亭ニテ和早稲田文学会ノ為メニ演説ス、○廿八日、文科大学教授会ニ赴ク、

学術上ノ要件

- 一 哲学思想ヲ叙述スルコト
- 一 西洋各国ノ哲学書類ヲ講究スルコト
- 一 仏書類ヲ通覧スルコト
- 一 神道史要ヲ著ハスコト
- 一 耶蘇教ヲ推究スルコト
- 一 駁耶蘇論ヲ著ハスコト
- 一 東洋語学ヲ研究スルコト
- 一 新体詩ヲ作為スルコト

三月三十一日、田村毛与来訪、毛与ハ故芳哉翁ノ妻ナリ、

○四月四日、黒田長成公ノ談話会ニ赴ク、○二十一日、潘飛声ノ書状来ル、○廿日、坂口前来訪、○二十四日、黒田長成公ノ園遊会ニ赴ク、朝鮮人權在衡(弁事大臣)金夏英(書記官)、金洛駿(翻譯官)支那人劉慶汾(翻譯官)仏国人エプラール氏并ニ渡辺国武等ノ諸氏ニ逢フ、

○五月

○六月十六日、元良、中島、横井、井上四氏ヲ招燕ス、○廿日島田重礼ニ招燕セラル、○廿五日、元良氏ト共ニ千葉教育会ニ赴ク、翌廿六日午前一場ノ演説ヲナシ、午後成田村ニ至リ、不動廟ヲ觀ル、○廿七日、早曉出發、木内宗吾ノ廟ヲ觀テ帰ル、○廿九日、黒田長成侯ニ亀清ニ招燕セラル、同日敬業社文盛堂ニ開花樓ニ招燕セラル

○七月九日、東京音楽学校ノ卒業式ニ至ル、○同日文科大学教師親睦会に至る、○十日、ラッド氏来訪、○十四日夜九日出發博多ニ赴ク、○十七日、午前十時比博多ノ津ニ到着、○十八日、養父井上鉄英卒ス、○廿三日太宰府ニ至ル、○廿四日、甘木ニ至ル、○廿五日、博多ニ還ル、廿六日博多ヲ出發ス、○廿九日、帰京、

○八月大乘起信論、法華経、楞嚴経、金剛経、般若心経、十善業道経、仁王経、円覚経、不増不減経、四十二章経、遺教経、阿弥陀経、無量寿経、観無量寿経、三國仏教略史、出定後語、出定笑語、出定笑語附録、赤保々、印度哲学小史等ヲ読ム、○三十一日、養父ノ墳墓修復ノ為金拾円ノ為換ヲ博多ニ送ル、

明治廿五年八月に至る

Draper. Conflict between Religion & Science

Höffding. Psychologie

(Etkennelse)

Hartmann, Erkenntniss theorie

Hartmann, Ästhetik

Lange, Materialismus

Kern, Buddhismus

Volkmann. Psychologie

Tylor. Researches into the Early History of Mankind, and  
the Development of Civilization

— . Primitive Culture 2 vols.

Huxley. Science & Culture

— . Critiques & Addresses

別記：ドイツ語の解説については、松宮秀治、末川清、渡辺知世、

Heinz Dieter Reese 諸氏の協力を得た。ここに感謝の意を

表すとともに、解説の誤りは筆者の責任であることを明らか

にしておく。

## 解題 「懷中雜記」——井上哲次郎の留学——

### 目次

- 一、 「懷中雜記」と井上哲次郎
- 二、 留学中の投稿記事
- 三、 留学の足跡
- 四、 ヨーロッパでの交友
- 五、 国辱演説とその波紋
- 六、 娯楽と文芸

### 一、 「懷中雜記」と井上哲次郎

ここに紹介する「懷中雜記」は、哲学者井上哲次郎のヨーロッパ留学と帰国後一年一〇ヵ月の日記である。二冊に分けられている「懷中雜記」の第一冊は一八八四年(明治一七)二月一五日—一八八九年(明治二二)二月三一日、第二冊は一八九〇年(明治二三)一月一日—一八九二年(明治二五)八月三一日、ともに東京都立中央図書館井上文庫に収められている。

中野実「井上哲次郎の日記について」<sup>(1)</sup>によると、井上の日記は八九冊が現存しており、「懷中雜記」はその最初の二冊ということになる。さらに井上の明治期の日記は「懷中雜記」を含めて一九冊、大正期が二六冊、亡くなる二日間の一九四四年(昭和一九)一二月

五日までの昭和期が四四冊現存しているということである。そのうち一九二二年（大正一一）一月一日―一九二三年（大正一二）六月三〇日間の三冊が東京都文京区立小石川図書館所蔵であり、この三冊と「懷中雜記」二冊を除く八四冊が東京大学史料室に所蔵されている。

また『東京大学史料目録』<sup>3</sup> 井上哲次郎史料目録「<sup>2</sup>解題」によると、これらの井上の日記は、一八九三年（明治二六）七月二十七日―一八九六年（明治二九）一月十一日の一冊のみは日付がとんでいるが、一九〇〇年（明治三三）以降のものでは初期の数年を除いてほとんど完全に記事があり、「日記としては完全に連続している」という。井上日記の現存しない箇所は

一九〇一年一月一日―六月三〇日

一九二五年一月一日―六月三〇日

同 年七月一日―二月三十一日

一九四三年六月一日―十月一日

一九四四年六月二十五日―十月一日

の五冊であり、このうち後ろの四冊は戦災で焼失したと注記されている。

さて、ここで、「懷中雜記」の形態に目を転じると、本史料は縦約一八センチの一〇行罫紙に墨書されており、翻刻からわかるように、欄外の書き込みや訂正、補筆が多い。筆跡も楷書で丁寧に書かれている部分と、走り書きに近い部分が混在している。さらに筆勢や墨の色からみると、数日分あるいは数ヵ月分をまとめて書いたものら

しい。「懷中雜記」は毎日書き続けたものではなく、何らかのメモに基づいて所要所でまとめて書き記したものと考えられる。

つぎに「懷中雜記」を理解する上で必要な、筆者井上の留学に至るまでの略歴と人的交流についておさえておくことにしよう。<sup>3</sup>井上は安政二年（一八五五）十二月、筑前国太宰府（現、福岡県太宰府市）の医師舟越俊達と母よ志の三男に生まれた。彼は幼少時、太宰府の儒者中村徳山入門、「大学」「中庸」をはじめ漢籍の素読を学ぶ。徳山は哲次郎の生涯において最初の師であり、両者の親交はヨーロッパ留学中も続く。哲次郎はドイツから徳山のために寿碑文を贈り、徳山はそれを「辞藻温麗、贊揚過情、殆不勝采荷」と喜びを表していた。その礼状が井上の許に届いたのは一八八九年一月二六日のことである。また「懷中雜記」一八九〇年二月四日条には、師徳山が七四歳で没したことも記している。

徳山への入門後、父船越俊達は三人の子供とともに甘木（現、福岡県甘木市）の医師富田家に養子に入り、哲次郎は同地で咸宣園出身の佐野文同に師事する。「甘木富田春山」（一八八八年一月一日条）は父俊達の養家であろう。その後哲次郎は甘木から太宰府の中村徳山の許に戻り塾頭をつとめる。これは「井上哲次郎自伝」によると一四歳の時であるというから、一八六八年頃のことであろう。そして洋学を志すようになった哲次郎は博多の村上研次郎の門を叩くが飽き足らず、一八七一年、一七歳で長崎の広運館に入学した。さらに一八七五年、上京して開成学校に入学、ついで一八七七年九月、東京大学に入学して哲学を専攻、あわせて政治学を修めた。

大学入学の翌年、一八七八年五月、哲次郎は博多の井上鉄英の養子となり、大学卒業の一八八〇年、井上縫子と結婚する。「懐中雑記」においても「妻へ書状を送る」という記述が散見される。井上は留学中、妻子を博多の実家に預けていたと思われる。というのは、帰国後間もない一八九〇年一〇月二六日条に「妻子博多ヲ出発」、三〇日条に「夜、父母妻子来了」と書かれているのである。このことから考えると「博多中洲二画本ヲ送ル」（一八八六年一二月二二日条）、「中洲に絵本一卷（中略）を送る」（一八八八年一〇月二日条）とある「中洲」は妻子の所在をあらわしているものと考えてよいだろう。このほかに「川端の伯父」（一八八六年三月二九日条）、「中州伯父」（一八八七年四月一五日条）とあるのは、博多の中洲川端に住んでいた伯父であろうが、井上家の一族であろうか。

さて、井上は東大で漢学を中村敬宇に、国学を横山由清に、仏典を原垣山、西洋哲学史をフェノロサに学び、同級生に岡倉天心、和田垣謙三がいた。「懐中雑記」では一八八七年五月二八日、二〇日、井上はパリでフェノロサと美術品取調の視察に来ていた岡倉と再会をはたしている。一八八〇年七月に大学を卒業した井上は加藤弘之、東大総理の勧めによって、その年の一〇月から文部省に入り『東洋哲学史』の編纂に従事することとなった。しかし文部省編輯局は一年ほどで退き、一八八二年三月には東京大学文科大学助教授の職につき、大学の編輯所で『東洋哲学史』編纂を継続した。翌一八八三年九月からは教壇にも立ち、東洋哲学史を講じた。その時の聴講生には三宅雄二郎、井上円了、日高真実らがいる。井上円了、日高と

は留学中も親交があり、特に井上円了とは頻繁に手紙のやりとりをしているだけでなく、哲次郎の留学中の著書『内地雑居論』は円了の哲学書院から刊行している。

この間、井上は一八八一年一〇月、開成学校の同級生杉浦重剛、福富孝季、千頭清臣らと『東洋学芸雑誌』を創刊、一八八二年八月には外山正一、矢田部良吉と『新体詩抄』を出版する。留学に出発した一八八四年二月には『異軒詩鈔』上・下を刊行した。福富、千頭とはドイツで対面し、外山には書翰を送っていることが「懐中雑記」に記されている。ちなみに「孝女白菊詩」は『異軒詩鈔』の著名な作品であり、のちに落合直文によって新体詩「孝女白菊の歌」として『東洋学会雑誌』五号（一八八八年三月二二日）に掲載され、一八九五年にはカール・フロレンツの独訳、一八九七年にはアーサー・ロイドの英訳が出版される。「懐中雑記」一八八七年二月一三日条には「孝女白菊詩訳成ル、独乙博言博士[Orrens]之を訳す」と井上は書いている。またこの詩は井上の自筆年譜によると一八八二年に完成したと記されているが、依田学海は一八八三年二月一日、これを批評している。『学海日録』一八八三年九月一七日条によると学海は井上の詩の点刪を行い、そのお礼を受け取る関係にあったようだ。八三年の批評は、『異軒詩鈔』の出版にあたっての学海の点刪であろう。また井上は一八八四年一月一七日、学海に留学決定を伝え、出発直前の二月一日には送文を請うていたことが『学海日録』に記されている。『井上哲次郎自伝』では「多くの名士が詩、歌、文等を以って自分の行を壮んにしてくれた」と書き、学海をは

じめ二一名の政治家、学者、詩人の名前をあげている。学海はこの送文について「余は理論の文に拙し。この文、実に己を得ざる事也」と、満足のいく出来ではなかったと書き残している。いっぽうこれらの送文に対して井上が返した詩が『懷中雜記』の冒頭一八八四年二月一五日条に書きつけている「遅々惜別出都門……」である。

## 二、留学中の投稿記事

井上は留学中、『東洋学芸雑誌』をはじめいくつかの新聞、雑誌に記事を送っている。雑誌記事についてはすでに『近代文学研究叢書』54 井上哲次郎に詳細な「著作年表」がある。これらの新聞、雑誌記事は「懷中雜記」の記述を肉付けし、その内容を理解する一助となるものである。

留学中の記事のうち最も早いものは『東洋学芸雑誌』三三三号（一八八四年六月二五日）の漢詩「臨赴独逸留別諸子」である。この詩は「懷中雜記」一八八七年六月六日条の挿入部分に書き留められているものと、ほとんど同文であり、異同が認められるのはつぎの三カ所である。

「東洋学芸雑誌」	「懷中雜記」
孤年欲向泰西発	孤身欲向泰西発
好為三身不鳴鳥	好為三年不鳴鳥
歌扇舞衫紅乱旅	歌扇舞衫紅盤旅

『東洋学芸雑誌』三三八号（一八八四年一月二五日）の「井上哲次郎来翰ノ大意」では、出発からパリ・ベルリンを経由して八月三日ハイデルベルク到着までの約半年間の模様が記されている。これは編集部のみし書きによると、三、四回分の井上来翰の大意を抜粋したものであるという。この三三八号の記事において井上は「懷中雜記」には書かなかったヨーロッパの風景や都市の印象を語っている。パリからベルリンに向かう汽車の中から見た山野は「概ネ天然ノ趣致ニ乏シ、唯其人工ノ遍ク到レルハ、洵ニ驚クヘシ」と、山野に至るまで人間の手が加えられていることを驚きをもって伝えている。そして初めて足を踏み入れたパリの街については、その外側は「宏麗雄偉、以テ文明ヲ表象スルニ足レリ」としながら、内側は「鄙猥淫褻」であると批判する。それは「演劇ハ婦人殆ント全身ヲ裸セルモノ、踏舞」であり、ルーブル美術館の「名画ナルモノハ、裸体ノ美人画ナルモノ」が多いと、街に裸体の氾濫していることをもって「鄙猥淫褻」であるというのである。そして「美術ニシテ觀者ノ心ヲ高尚ナラシムルニ足ラザル此ノ如シ、其他識ルヘキナリ」と、自らの文化論を展開する。

このパリに対してベルリンは「塵埃充滿シテ、大氣清浄ヲ欠ク」と、その空気の悪いことをあげつらうものの、彼の記述からはドイツ人とドイツ社会に対して好感を持っていることがうかがえる。その良しとするところの第一は、ドイツ人は身体が強健であり、第二に外出遊歩の美風を持っている。ただし街頭での飲食は見るに忍びない、第三に家族の状態が非常に良い。「一家団欒、渾々和樂」で



あり、「絶テ家翁ノ権盛ニシテ、家屬皆屏息スルガ如キ弊ナシ」であるという。第四に、井上は何よりもドイツ女性をつぎのようにはめ揚げるのである。「当府ノ風ハ、質朴ニシテ、婦人ナドモ嘗テ巴里ニ於ケルガ如キ艶美艶装ノモノヲ見ズ、唯其白皙ニシテ長頤、壮健ニシテ亦智識アル容貌ヲ具フル」と。

これは井上の投稿ではないが『東洋学芸雑誌』四〇号（一八八五年一月二五日）の森林太郎「盗侠行訳独逸神史」に、井上の評言が付されている。前年十一月の日付で「一部好説話。以才筆抒之。字々生動。風趣無限。何等妙作」と井上は評している。

『東洋学芸雑誌』四一号（一八八五年二月二五日）の「井上哲次郎氏より来翰」は前年二月一日ハイデルベルク発、同誌四五号（一八八五年六月二五日）は四月二三日ハイデルベルク発、同五〇号（一八八五年十一月二五日）は八月二八日ハイデルベルク発、同五四号（一八八六年三月二五日）は二月二七日ライプツィヒ発、同六三―六四号（一八八六年二月二五日―一月二五日）は九月一二日ベルリン発の投稿であり、それぞれ各地の大学や日本人留學生の現状を伝えている。

その後、井上の投稿は留學生生活のスケッチから、ヨーロッパの學問状況の報告に変化する。『哲学会雑誌』一一三（一八八七年四月五日）には前年九月のウィーンでの万国東洋学会、『東洋学会雑誌』三一一（一八八九年一月）には同年九月のストックホルムでの同会の模様を報道している。ストックホルム会の報告は、同文のものが『時事新報』一八八九年二月一四日にも掲載されている。『時事

新報』へ記事を送ったことは、『懷中雜記』一八八九年九月三〇日条に記されている。ついで『哲学会雑誌』二二二〇・二二二一・二二三（一八八六年九月五日、一〇月五日、十一月五日）に「仏國哲學の概況」を、『大日本教育會雑誌』九の号（一八八九年九月一〇日）に「柏林東洋學校ノ景況并日本學ヲ我邦ニ振興スベキ事」を掲載している。後者の論文は『日本大家論集』一一二九（一八八九年一〇月五日）、同二一三（一八九〇年三月一〇日）に再録されている。

このほか、『哲学会雑誌』一一六（一八八七年七月五日）雜報欄に、同誌一一二所載「厭世教の影響」を批判した短文が「井上哲てつじ二郎氏てつじの書翰」としてある。『東洋学会雑誌』三一五（一八八九年五月）には論文「諸子百家ノ言西哲ノ論ト暗合スルノ説」が、同三一八（一八八九年八月）には「古人取法於天地論」が、そして『國民之友』七〇号（一八九〇年一月二三日）には同六三号の井上の著書『内地雜居論』書評に対する反論「内地雜居論の批評を読む」を書いていゝる。この『國民之友』への投稿については『懷中雜記』一八八九年一月一四日条に記述がある。

### 三、留学の足跡

「懷中雜記」は時期や事件によって記述に精粗があり、頻繁に移動をしているので、一読しただけでは井上の動きや所在が判りづらいものになっている。そこでつきに彼の留学中の足跡を辿ってみるこ

とにしたい。

一八八四年二月一六日、横浜からフランス船メンザレー号で出航した井上は二二日、香港に到着。二六日、フランス船サガリアン号に乗りかえて香港を出航、サイゴン、シンガポール、コロンボ、アデン、スエズ、ポートサイド、ナポリを経て、三月二八日マルセイユに到着しグランドホテルに投宿する。横浜を出航して四三日目である。

翌二九日マルセイユ発、三〇日にパリに到着し、ホテル・ド・リボリに投宿。四月二日午前七時パリ発、三日午前六時ベルリンに到着し、マゲデブルグ泊。八日朝にはドエレン宅を下宿先として以後、八月三日にベルリンを發つまで住居を移った様子はない。四月一日から個人教授について哲学・語学の学習を開始し、これを七月三一日まで続ける。この間の記述は非常に少なく、六月には「苦学」の文字が見える。しかし勉強ばかりしていたわけでもない。「懷中雜記」には書かれていないが、前述の『東洋学芸雜誌』三八号によると四月三日―八月三日のベルリン滞在中、パノプチウム（蠟人形）見物を楽しんでいる。

八月三日夜七時ベルリン発、四日午前一〇時頃ハイデルベルク着。ミュラー教授宅に下宿する。このハイデルベルク滞在は井上の本格的な留学の始まりであり、翌年九月三〇日まで同地に留まる。下宿先のミュラー教授はギムナジウムの先生で、外国人、特に日本人の下宿人を多く置いていたと井上は『自伝』で書いている。一〇月二五日にハイデルベルク大学に入学するが、大学以外に八月―二月二

八日 Kromer 氏に週二時間ドイツ文を、一月―九月二九日ミュラー教授にドイツ文学を、三月―八月二五日 Dunder 氏にフランス語をそれぞれ学んでいる。

一八八五年九月五日、井上は留学の一年延長の許可をうけ、三〇日ハイデルベルクを出発し、フランクフルトを経て、ライプツィヒに向かう。フランクフルトではホテル・ド・ユニオンに一泊し、ゲ―テハウスを訪れ、夜はオペラを鑑賞する。一〇月一日ライプツィヒに到着し、リイビヒ街五番地のフォーゲル夫人宅に下宿する。後述するようにこの下宿は森林太郎の勧めによるものである。ライプツィヒには翌年四月三日まで、約半年間の滞在である。一〇月一八日ライプツィヒ大学に入学し、ここでも大学のほかにフランス語、ラテン語、イタリア語の個人教授をうける。留学してすでに一年半、井上もヨーロッパの地に馴染み、ライプツィヒではコンサート、芝居、オペラ等を精力的にまわっている。ところで「懷中雜記」一八八六年三月一〇日条で「ローエン格林」を一緒に観たと記している「ニーダーミラー」は、下宿のフォーゲル夫人の娘アンナ・ニーデルミュレルである。アンナ以外にも、この頃から女性の名前が登場する。

一八八六年四月三日午前八時二九分ライプツィヒを出発、一二時三〇分ベルリンに到着し、ドロッテン街三六番地エンゲルブレヒト宅に下宿する。翌年三月二六日まで約一年間同地に滞在する。四月一六日ベルリン大学に入学、ほかにラテン語、フランス語、ギリシア語を学習する。九月一八日―二四日物理医諸専門会に出席し准会

員となる。また前述のように九月二十七日—一〇月二日のウィーンでの万国東洋学会に出席して会員となる。このベルリン滞在期より井上は積極的にヨーロッパの学界に参加し始める。

一八八七年三月二十六日ベルリンを出発し、二十七日パリ着、ひとまずオテル・ヴィオレに投宿し、翌日オテル・サルピスに移る。その後六月二日からはミルマン宅に下宿する。このミルマンなる人物は、あるいは西園寺公望・大山巖・榎崎頼三など多くの日本人留学生を指導した人物と同一人物かもしれない。パリ滞在は半年にすぎないが、この間ソルボンヌ大学で受講し、アルカンポーにフランス語を習っている。アルカンポーは『原敬日記』にも登場する日本外務省現地雇いのフランス人で、パリ在住の日本人はもっぱら彼にフランス語を学んだようだ。

一八八七年九月二十六日パリを出発、二十七日ベルリンに着き、もとの下宿エンゲルブレヒト宅に入る。この間ロンドンや北欧への旅行はあるものの、ベルリンには一八九〇年八月八日まで滞在し、井上の留学最終地となる。二度目のベルリン滞在は東洋語学校講師としての生活であり、一〇月二十七日に開校式が行われた。三年半ぶりに教壇に復帰したわけである。この東洋語学校講師就任以後、清国人との交際が始まる。一八八八年八月二日、井上はベルリンを出発し、ブリュッセルを経由して五日ロンドンに到着し、一四日スペインサーを訪問する。帰りはパリ・ジュネーブ・ベルン・ルツェルン・ミュンヘン・ウィーン・ドレスデンで休暇を楽しみ、九月一四日ベルリンに戻っている。翌年八月二五日ベルリン出発、ハンブルク・コペ

ンハーゲンを経由して三一日ストックホルムに到着、前述のように九月二日—七日万国東洋学会に出席、ひき続き八日—一日クリスチャニアでの同会に出席して、一四日ベルリンに到着。

足かけ七年にわたる留学を終えて井上が帰途についたのは一八九〇年八月八日、この日午後七時にベルリンを出発し、ミラノ・ヴェニスなどイタリア各地を観光して、九月一日ゼノア港を出航、一〇月一三日、日本に帰った。

#### 四、ヨーロッパでの交友

井上が留学中、現地で直接会ったり、手紙のやりとりをしていた日本人は表1のとおりである。その中の森林太郎・大森鍾一・原敬らは同時期にヨーロッパに滞在しており、日記を残している。鷗外研究の上で、彼のドイツ体験を調査する際、『井上哲次郎自伝』が使われる。ここでは鷗外の『独逸日記』や大森の「外遊日記」から井上のヨーロッパでの動きに光を当てることしよう。

鷗外の『独逸日記』はベルリン到着の翌日一八八四年一〇月二二日から一八八八年五月一四日までの日記である。この三年七ヵ月の記述の中で井上の名前が一五回出てくる。順を追ってみてみることにしよう。『独逸日記』一八八四年一月二二日条に森は「ハイデルベルヒ Heidelberg なる宮崎道三郎の書到りぬ。封中井上哲次郎のわが盗侠行（水沫集六〇九面）を改削し、評語を加へたるあり。井

上と相識るやうになりたるをば、嬉き事におもひぬ」と記している。ここに出てくる「盗侠行」は前述のように翌年一月の『東洋学芸雑誌』四〇号に掲載される。一月二日、森はベルリン、井上はハイドルベルクである。森に手紙を送った宮崎は、『井上哲次郎自伝』によると、井上と同様ミュラー教授宅に下宿していたという。この時点で井上と森とは直接の面識はない。両者が初めて顔を合わせるのは一ヵ月後である。

『独逸日記』一八八五年一〇月一日条には「宮崎津城（道三郎）及井上巽軒ハイデルベルヒHedelbergより到る。フォオゲル氏の家に住す。余が勧むる所に従ふなり。津城は余と同じく西に航せし一人にして温厚の君子なり。巽軒は此回始て相見る。容貌古怪、面上少しく痘癍あり。雄弁快談傍ら人なきが若し。其詩集及東洋哲学史の草稿を示さる。此夜独逸に來しより以來始て東洋文章の事を談ず。快言ふべからず」とある。この記述はライプツィヒ滞在中のものである。井上がフォオゲル夫人宅に下宿したことは『懷中雜記』にも書かれていたが、『独逸日記』によるとこれは鷗外の勧めに従ったものであるという。鷗外は一八八四年一〇月二日にベルリンからライプツィヒに移り、「ヨオル」夫人宅に下宿しており、午餐、晚餐はリイビヒ街のフォオゲル夫人宅を使っていた。鷗外とフォオゲル夫人とは家族ぐるみの交際をしており、コンサートやパノラマ見物と共に楽しんでいた。フォオゲル夫人宅は大きな下宿屋であったらしく、『独逸日記』一八八四年一〇月二三日条によると、「ドイツ、ギリシア、アメリカ、イギリスの学生や商人八名程が住んでいたと

いう。陸軍一等軍医として医学研究に日を送っていた鷗外は久かたぶりに文学談義に花を咲かせ喜びにひたっているが、いっぽうの井上は、ライプツィヒ到着とフォオゲル夫人宅に下宿をしたことだけを記している。

鷗外はこの井上との初対面から一〇日後の一〇月一日にはドレスデンに向かうが、この間、二日、四日にも井上の記事がある。二日条では「荒木卓爾伯林より來る。巽軒の室に相見る」、また四日条では「櫻村、井上、萩原、佐方と同じく水晶宮に至る。影戲を觀る」とかかれていた。これに対し、『懷中雜記』では四日条で「櫻村清徳、榊某、坂田某、萩原某來訪、櫻村榊二氏伯林ニ赴ク」とあるだけで、森の名前はない。ただ井上が『東洋学芸雑誌』五四号に「去る十月の頃当所にて偶然メリニー氏の幻術を觀たる」と書いているのは、『独逸日記』の「影戲」であろう。

ドレスデンに移った鷗外はこの年のクリスマス休暇にライプツィヒに戻り、十二月二十四日から三〇日まで同地に滞在する。『独逸日記』一二月二四日条に、フォオゲル夫人宅で井上が宮崎道三郎らと森を出迎えたことが記されている。二七日条には「夜井上とアウエルバハ塞Auerbachskellerに至る。ギョオテの「ファウスト」*Faust*を訳するに漢詩体を以てせば何如杯と語りあひ、巽軒は終に余に勧むるに此業を以てす。余も亦戲に之を諾す」とある。これに対し、『懷中雜記』は「二十頃休業」と記しているだけである。

一八八六年二月二日条の『独逸日記』には萩原三圭の息子の誕生日を祝って森と井上が詩を贈ったことが記されている。井上はライ

プツイヒ、森はドレスデンである。そこに記されている井上の詩は、「懷中雜記」一八八七年六月六日条の挿入部分で見ることが出来る。この詩も、「独逸日記」と「懷中雜記」では異なるがある。

『独逸日記』 「懷中雜記」

名命午生蓋得宜 名命午生尤得宜

也当進益速於馳 也当進道速於馳

この年の八月九日、森はミュンヘン（三月八日からミュンヘン滞在中）からベルリンに帰り、翌日、井上と八ヵ月ぶりの再会をはたしている。『独逸日記』八月一〇日条で「商店に至る。午後三浦信意、田中正平と語る。井上異軒繼いで至る。詩文を談ず。已にして俱に一酒店に至る。美小艾あり。異軒と相識る。興を尽くし帰る」とある。森は一日にはミュンヘンに戻っているが、「懷中雜記」には森や酒店の「美小艾」の記述はない。

ウィーンの万国東洋学会の帰途、井上はミュンヘンの鷗外を尋ねている。『独逸日記』一八八六年一〇月六日条には「井上異軒来る。端西行の帰途なり、又「シユニヨル」に飲む。詩文を談ず」とあるが、スイス行は誤りである。井上がミュンヘンに到着したのは一〇月五日の夜、「懷中雜記」には六日は「展画場ヲ觀ル」とある。『独逸日記』には六日は「展画場ヲ觀ル」とある。『独逸日記』の翌七日条では「夜井上を伴ひて劇を観る。演ずる所を餐董者 Veichenfresser とす。独軍尉官の状態を模写す。頗る興あり」と書いている。これに対し井上は「再ビ展画場ヲ觀夜森林太郎氏ト共ニ演劇ヲミル」と、唯一、「懷中雜記」に森の名前が登場する。井上は一月にベルリン

に帰った。

翌一八八七年四月一六日、鷗外はベルリンに移るが、井上は三月二七日から九月二六日までパリに滞在、鷗外も九月一六日から一〇月九日まで旅行に出ており、二人が再会したのは『独逸日記』によると一〇月二八日である。一年ぶりの邂逅を森は「井上異軒に逢ふ。異軒今伯林東洋語学校の教官たり。ランゲ Langbe と俱に日本語を授く。余に贈るに写影一葉を以てす」と記している。「懷中雜記」に二八日の記述はない。この日から一二月三日までの約一ヵ月の間に『独逸日記』には対面記事があつて四回ある。二人が頻繁に顔を合わせた時期である。森は一月二日の夜には、井上・高橋繁と酒家「クレッテ」に集い、九日には「井上異軒の仏教耶蘇教と孰れか優れる」と云ふ論<sup>（タラ）</sup>を聞いている。また一月二〇日条では「夜ミユルレルを訪ふ。哲二郎も亦至る。東洋語学の事を論ず」とあり、井上は「薄暮博士ミレル氏ヲ訪ヒ、談笑時ヲ移ス、亦一種ノ畸人也」と、「ミレル氏」の印象だけを記している。

一月三日条は『独逸日記』の中で井上が登場する最後の記事である。この日記は翌年五月一四日まで続くが、その半年間、井上の名前は見えない。三日条で森はつぎのように書いている。

夜異軒と会す。異軒独逸の詩人フロオレンツ Florenz を伴ひ来る。フロオレンツ名はカル、アドルフ Karl Adolf 猶少年なり。余に詩稿を示す。中にウ、ランド Umland を詠ずる作あり。ハイネ Heine を客と為し、彼を揚げ此を抑ふ。頗る誦す可し。日ふ。將に訳東洋詩一卷を梓せんとす。訳する所は李太白と井

上異軒との詩なりと。余肚裏に謂へらく。西人の東詩を訳する、支那には毛詩に止り、日本には古今の春の部に止る。フロオレンツの挙洵に称す可し。然れども李太白と異軒とをして相對せしむるは、奇に過ぎたりと。(略)

「懷中雜記」では「フロレンス氏ト共ニ會シ、談話久之」と記している。この年の二月十三日にフロレーンツが「孝女白菊詩」を翻訳していること、一八九五年にそれを出版することはすでに述べたところである。井上はそのフロレーンツを森に紹介したわけである。「独逸日記」の井上記事を順に見てくると、森ははじめ井上と知りあえることを喜び、初対面の際は小麦熱のこもった記述になっていた。それが、一八八六年頃より次第に冷静に書かれるようになり、その後のベルリンでの再会以降は頻繁な交流とは対照的にかなり両者の距離を感じさせる書き方に変わってきたことに気がつくのである。「李太白と異軒とをして相對せしむるは、奇に過ぎたり」と記した森は、以後、井上の名前を書いていない。

つきに内務官僚として地方自治制を学ぶためドイツに二年間留学した大森鍾一の「外遊日記」を見てみよう。大森は留学当時メモ的な日記をつけており、これを一九三三年(大正一二)に文章化して整理したものが「外遊日記」である。「外遊日記」は一八八五年八月九日の日本出立から一八八七年四月三〇日の香港帰着まで一年八ヵ月の記録である。井上について書いているのは三ヵ所、いずれもベルリンでの記述である。「外遊日記」一八八六年四月二三日条では「三宅、井上(哲一郎)邂逅す。午食を共にす」とあるが、「懷中雜

記」には同日の記述はない。

ついで「外遊日記」同年五月一日条は「午後中沢来、ドイツチェステアートルへ誘引に付、小松原安着の祝に参り、直ぐに浜尾へ尋ね、井上哲待合せ、同道七時劇場へ入る。哲学者レッシング一代の傑作なりといふ。三教、回猶耶皆一にして、博愛の義、教旨に依て異なるべからざる旨を説く。指輪三個を列ねて繋ぎ合せたる図なり。同氏此説大著作ありと云ふ」と書いている。これに対して「懷中雜記」でも「此夜浜尾大森三宅諸氏トレッシング氏「ナタン」ヲ独乙劇場ニ觀ル」と記している。

大森は一八八七年三月二七日帰途につくが、井上は三月九日午後、彼のために「離筵」を開いたと書いている。「外遊日記」九日条には宴席の記載はない。そのかわり同月一二日条に「小松原、ランゲ氏方に暇乞に廻る。帰途井上哲二郎と同道小酌、深更に及ぶ」と書かれている。「懷中雜記」の方には「二日条はない。「離筵」と「小酌」が同一のものであるのかどうかは判断がつかない。「外遊日記」の井上の登場回数は決して多くはないが、両者の親しい交際ぶりが伝わってくる。

半年間のパリ滞在中、「懷中雜記」には四ヵ所に原敬の名前が出てくる。当時原はフランス公使館書記官・臨時公使代理である。一八八七年六月一〇日条では「日本公使館に至り、原敬氏と政治を談ず」、七月九日条「原敬氏ニ招燕セラレ、大石正巳齊藤修一郎二氏ニ遭遇シ、日本ノ政治ヲ談論ス」、九月二四日条「公使館ニ至リ、原氏ニ逢フ」一〇月一三日条「原宮川加藤田島四氏ニ書状ヲ送ル」と書

いている。これに対して原は、四月一七日条に「日本人会例会あり井上哲二郎演説ス」七月九日条に「大石、井上哲二郎ヲ招キ晩食セリ」と記している。井上は、森に対するのとは異なり、原について熱心に記述しているように見える。

以上の森、大森、原のほかには石黒忠憲の日記がある。石黒は森の上司であり、一八八七年七月から約一年間ドイツで視察を行った。

一八八七年九月一日から翌年一二月二日までの三冊の「日乗」が『鷗外全集』の月報に抄出されている。石黒はベルリンを本拠に活動しており、井上と同時期に同じ街に暮らしていたことになる。この

「石黒日記」では三ヶ所「井上氏」「井上」が登場する。一八八七年一月三日条は「公使代理井上氏」、同年一二月三一日条「午後九時井上氏ノ招ニ応シテ往ク」とあるのはいずれも井上勝之助である。

問題は同年一二月一〇日条の「夜大和会ニ森ト同行シテ夕食ス井上ヲ待ツ不到」である。「懷中雜記」には一〇日条はないが、『独逸日記』では「石君と「クレツテ」で晚餐す」とある。「石黒日記」一月一〇日条の「井上」が哲次郎である可能性もある。

いっぽう「懷中雜記」一八八八年五月八日・九日条に「石黒氏を訪ふ」の記述があるが、もちろん「石黒日記」には記載はない。石黒と井上の間に多少の交際はあったものの、軍医石黒の視界には井上はほとんど入っていなかったようである。

## 五、国辱演説とその波紋

『時事新報』一八八九年四月三〇日に「伯林近信」という、ベルリン在留邦人の動向を伝える記事がある。これは三月一九日ベルリン発の書信による記事であるが、その末尾に井上の名前が出てくる。

「井上哲次郎氏は先日或集會に於て日本婦人の常憤と云へる演題にて一場の演説を催したるに当府の大和會員は大に不満を唱へ井上氏は遂に同會を退く事と相成申候」と、大和会での演説が在留邦人の反発を呼んだことを伝えている。この事件については小股憲明が『日本教育史往来』八二号（一九九三年二月二十八日）に「井上哲次郎の国辱演説事件について」と題して報告しているが、ここでもう一度トレースを試みたい。

井上は「懷中雜記」二月六日で「Architektendhausノ講堂ニ於テ日本婦人ノ事ヲ演説ス、來聽人大約參百五十人ナリ」と、演説を行つた事だけを述べ、聴衆の反応については書いていない。また演題が「日本婦人の常憤」「日本婦人ノ事」と書かれているだけで肝心の演説の内容は伝わっていないのである。竹越与三郎もしくはその近くの記者が「誤摩嘉四之助」の名で『世界之日本』二一一（一八九八年九月一〇日）に「井上博士の大名論」と題した一文の中でつぎのように書いているのが手がかりとなる。「足下知らずや井上氏は古今無双の大義士に候、此人は独逸ベルリンにて独逸語の公會演説を試みて、日本の婦人は凡て売淫婦の如しとし、イザナギイザナギの噂は蕃夷の子なりと放言し、日本人同志に攻撃せられ一命も危

ふかりし所を、一枚の謝罪文にて済ましたる人に候、此謝罪文は日本公使館の人口に張って、公衆に示めしたれば、之を見たる人多かるべし」と。

この記事によると井上演説で問題になったのは、(1)日本婦人はすべて売淫婦の如し、(2)イザナギ・イザナミは「蕃夷」の子である、という二点のようである。事件から九年後の記述ではあるが、このニュースソースが当時のドイツ公使西園寺公望だと考えられると事実に近いと見てよいのではないだろうか。西園寺がドイツ公使をつとめたのは一八八七年六月—一八九一年八月であり、事件当時もベルリンに詰めていたと考えられる。大和会はベルリン在留邦人の集りであり、公使は当然職務の一貫として出席していたことであろう。鷗外は『独逸日記』一八八七年二月二六日条で大和会で新任の西園寺公使を歓迎したことを、また一八八八年一月二日条に、大和会の新年会で西園寺公使に「外邦の語に通曉すること此域に至るは敬服に堪へず」と言われたことを記している。しかも『世界之日本』によると、謝罪文を張り出したのが日本公使館の入口であったというのだから、公使の眼に触れないはずはない。そして『世界之日本』という雑誌は竹越が社長、編集長ではあるが、その背後にいたのは陸奥宗光と西園寺である。<sup>13)</sup>『世界之日本』を創刊するにあたって竹越は陸奥グループから西園寺人脈のひとつになっており、非常に近いところにあった。竹越が西園寺からドイツ時代の井上の事件を聞いていたことは充分考えられるところである。

それでは井上の日本女性への低い評価とはどこから出てきたもの

だろうか。ここで前述のドイツ女性への評価を思い出していたきたい。ドイツに到着して間もない井上はつぎのように書いていた。

「当府ノ風ハ如キ質朴ニシテ、婦人ナドモ嘗テ巴里ニ於ケルガ如キ艷美艷装ノモノヲ見ズ、唯其白皙ニシテ長頰、壮健ニシテ亦智識アル容貌ヲ具フル」とドイツの女性をほめ上げたうえで、これは「日本婦人ノ無キ所ナリ」と日本女性を批判している。ここで井上がドイツ女性を良しとしている評価のポイントは(1)質朴、(2)壮健、(3)知性の三点であり、パリの女性をひきあいに出して「艷美艷装」と批判している。この記事の冒頭の部分で井上は、航海の途上立ち寄ったアジア各地で日本人売春婦を目撃したことを記している。「香港柴棍両地、我邦ノ良民至テ少ナクシテ、売淫婦ノ割合ニ多キハ、外国ニ対シテ愧ツヘキコトナリ」と井上は書いているが、これは明治期の日本人渡航者の多くが記録しているところである。大森鐘一も前述の「外遊日記」一八八五年八月一五日条で、香港には娼家があり、これは日本人が密航して娼婦となったものだとして記している。香港、サイゴンで売春をしていく日本人女性を見、「艷美艷装」のパリの女性を見て、「白皙、長頰」のドイツ女性に出会ったのである。

しかも井上は下宿屋のフォーゲル夫人をはじめ、多くのドイツ女性と交際している。名前だけを拾いあげると、エンゲルブレヒト婦人、ブレマン婦人、ミレル婦人(ミュラー婦人)、ミラー女史と同一人物か)、セプレル婦人(シェプレル婦人)、ロエジツケ婦人、ユーリ婦人、少女タム、ラーゲルストローム婦人、ハルトマン婦人、アイテル婦人、ツアンチール姉妹、モンチ女史、エミリー(密梨)で



あり、このほかウィーンの哲学女史トラスコウィッツ、クリスチャニアのウィング女史、ゴテンブルクのヤコブソン婦人、ヨンソン女史ら、学問の世界で出会った女性達もいる。彼女達と井上は、芝居に、コンサートに、散歩に出掛け、家庭に招かれ、帰国間際には恋人らしい女性との別れもあった。このような交際を通して井上は、到着早々の好印象を深めていたのではなかっただろうか。文字の上では「男女同権」が雑誌の論調を賑わし、女学生の風俗が耳目を驚かすことがあっても、当時の日本では考えられない出来事であろう。

「懷中雜記」にもどると、井上はアルキテクテンハウスでの演説の二週間前、一月二〇日に日本から送られた「女大学」「歴世女装考」を受けとっている。この二冊が演説のネタになったことは想像に難くない。「女大学」は正徳四年（一七一四）以降、大阪の柏屋清右衛門らによって刊行された女子教訓書で、貝原益軒『和俗童子訓』の「女子を教ゆるの法」からとってまとめられたものである。同書は女性の結婚後の心得を説き、夫・しゅううとに仕える道を強調する。『歴世女装考』は山東京山著、弘化四年（一八四七）版、古代からの女装、特に結髪、整髪具などを文献や絵図で考証している。井上はこれらの書物を手がかりに日本女性を質朴、壮健ではなく、知性を持ちあわせおらず、身体を飾ろうとする売淫婦の如き存在だと批判したのではないだろうか。反発を買った二点目、イザナギ・イザナミの件は、ドイツ仕込みの人類学の井上流の成果と考えられる。

アルキテクテンハウスでの演説から一八日後の二月二四日、井上は大和会を退社し、翌三月三〇日には、大和会で答弁を行っている

ことが「懷中雜記」に記されている。前述の『時事新報』の記事は三月一九日発信というから、井上の弁明以前に書かれたことになる。井上の弁明で事態収拾に向かったらしく、四月七日には、井上方に田中、東条が訪れ、東条に謝罪文を托した。「懷中雜記」四月七日条に書きつけられた謝罪文が、公使館入口に掲示されたのである。ヨーロッパ在留中は真理より愛国心を第一にすると述べたこの文章の後段で、井上は、以後機会を得てベルリン市民に問題の点を「挽回」するよう勉めると書いている。ドイツ語で行われたこの演説は、在留邦人だけでなくベルリン市民の耳にも届いたのだろう。それが「国辱」として大きく取り上げられた要因であったと考えられるのである。

謝罪文を出して二ヵ月、「懷中雜記」六月一四日条に井上は「時事新報社に書状を送る」と書いている。その結果が同紙八月二日の雑報「伯林の井上哲次郎氏」であろう。これは四月三〇日の「伯林近信」の続報である。「大和会員が不満を唱へしとあるは井上氏と双方の間に所見の異なる所より一時紛紜を生じたる訳にて其後幾程もなく平穩に帰し且つ又井上氏が大和会を退会せしは氏の一個人の都合によりて為せしもの、よし誤解の人もあるべければ一言の弁明を請ひたしと先方より申来りたれば茲に再記す」という弁明の文章であり、井上の書翰によって書かれた記事と考えられる。井上は『時事新報』へ投函する一〇日程以前の五月二四日、翌年八月で帰国することを決心した。彼が四月三〇日の記事を読んでいたことは充分に考えられる。一年後の帰国を控えて、日本国内に向けた弁明を行っ

たものであろう。

## 六、娯楽と文芸

「懐中雜記」の留学記事をみると、井上が芝居やコンサートに頻繁に足を運び、また清国人と詩の交換など密接な交際をしていることに気づかされる。そこでつぎに井上がヨーロッパで出会った東西文化について簡単にふれておくことにしたい。彼がヨーロッパの諸都市で見聞した舞台、見世物は表<sup>2</sup>のとおりである。「懐中雜記」に登場する観劇記録の初出は、フランクフルトでの「オペル」であるが、これは「稍々佳ナリ、其曲深く賞スルニ足ラズ」と素気ない。この「オペル」については『東洋学芸雜誌』五四号でも「粧飾音楽共に絶佳唯々其曲深く賞するに足るものなし」と書いている。それが三ヶ月後ライプツィヒのノイエステアトルで観たシラーの「ウィリアム・テル」は「戯曲音楽共に佳大に生をして感動してめたり」と、その感激を記している。この舞台で井上がことに関心をもったのは「裝飾」、舞台美術であつたらしく、「真に其処に居て其の景を見るが如く身の戯場にあるを賞へざるに至る」とその迫真的な装置を絶賛している。そして「我邦演戲の改良を図るもの頗る粧飾の事にも注意せざるべからず」と、日本の演劇改良に注文をつけている。ノイエステアトルの舞台に感激した井上は一八八六年三月には二週間の間に三回も観劇に出かけている。ことに一九日にはノイエス

テアトルの見学もした模様で「懐中雜記」同日条に俳優の数や彼らの待遇、装置や衣装につき細かく記している。演目のうち、ワーグナーのオペラが二作品ある。これは明治末年、ワグネリアンのひとりとなる井上の嗜好が、留学中に形成されたものと考えられることもできるだろう。

ヴァイオリンの演奏はサラサーテとルビンシュタイン二人の記述がある。サラサーテについては『東洋学芸雜誌』五四号で「生未だ音楽に嫻<sup>なま</sup>はざるを以て敢て妄に評を下し難しと雖も其調極めて面白く聞へたり」、「琅玕の相摩するが如く夜雨千点竹林に澆<sup>しほ</sup>ぐが如く清泉の空湧するが如く秋風颯々芦葦を摧くが如く孤鶴の晴空に嘯くが如く条然一変幻人をして覚へず嘆賞せしめたり」と激賞している。ルビンシュタインについても「懐中雜記」一八八六年三月一日条で「音調ノ美、變化ノ妙、驚絶歎絶、此技ニ於テ三昧ヲ極ムル者ト謂フベシ」とその技巧を讃えている。

井上はまたオペラやクラシック音楽だけでなく、パノプチウムやパノラマなどの見世物を好んで見ている。一八八四年ベルリンで観たパノプチウムについて、これは「懐中雜記」には記述がなく『東洋学芸雜誌』三八号につきのように書いている。「伯林府ニ「パノフチコム」ト云ヒテ、蠟人形ノ見セ物アリ、一日往テ之ヲ見、大二愉快ヲ感セリ、就中「ソクラテース」氏が状貌肥大、死ニ臨ミ從容椅子ニ倚レル、「カント」氏ガ瘦顔短頸、杖ト帽トヲ携テ立テル、拿破侖一世ノ腕ヲ組テ思フ所アルカ如キ、「ダーウキン」氏ノ顔面不思議ニモ猿猴ニ類スルガ如キ、或ハ老練ノ思想ヲ表象シ、或ハ沈勇ノ精

神ヲ望見スヘク皆最モ感動ヲ与ヘタリ」と、外形だけでなく思想・精神をも表わすものだと感心しているのである。古今の学者や政治家を題材にしている点でも、幕末以来浅草の奥山で好評を博していた生人形、『八犬伝』などの物語や遊廊の風俗などを写した日本の見世物とはひとあじ違うものであったろう。

パノラマもベルリンではじめて見たはずである。日本に最初のパノラマ館が建設されるのは井上がベルリンを出発する少し前、一八九〇年五月のことである。ベルリンのカイザーパノラマについて井上は見に行った事実を記しただけであるが、彼の留学時代のノート、東京大学史料室所蔵井上哲次郎史料Ⅱ『Notes on Miscellaneous Subjects Paris, 15 Avril, 1887』にはカイザーパノラマのチラシがはさみまれている。パノラマを楽しんで持ち帰ったものだろう。

また井上は「幻術」についても二度記している。一八八五年、ライプツィヒでのメリニー氏の幻術と、一八八八年四月一八日のベルリンでのベンアリベー氏の幻術である。ベルリンの方は「懐中雑記」同日条に「頗ル奇」と書いているのだが、ライプツィヒの方は『東洋学芸雑誌』の五四号につきのように記している。「幻術を行ふ所は尋常の戯場と異ならず燈火明にして広さ四五間ある舞台の上に種々の人物出でて演劇をなすことなり人物は皆人造の人形にして殆ど真誠の人の大きなり頗るこみりたる芸をなすこと真に自動の作用による者の如く見ゆ」といい、「其の技の巧妙なる其変化の速なる実を生をして驚嘆せしめたり」と、人形の動きに感嘆している。この記述から考えると、井上のいう「幻術」とは自動人形のことであろう。

ロンドンのフェアで一八世紀以来、文字を書いたり楽器を演奏したりする自動人形が人気を呼び、科学技術の進展にともなって井上が観た一九世紀末にはさらに精緻なものになっていた。お茶を配ぶ日本のからくり人形とはケタちがいの自動人形を彼は幻術と呼んだのである。井上は西洋の学問だけでなく、同時代の街の空気をも吸収していたといえるだろう。

さて、井上はヨーロッパで多くの清国人と交際をしている（表3）。パリで出会った林振峯を除くと、すべて二度目のベルリン滞在中のことである。なかでも関桂林・潘飛声・姚文棟の三人とは親密な交際をしている。関・潘とはじめての出会いは一八八七年一月二日、東洋学校講師となった井上がプロシアの文相に面会した際のことである。関・潘はともに東洋語学校の井上の同僚であり、関は「支那語実地演習」の「北支那語」を、潘は「南支那語」を担当していた。初対面から一〇日後の一月三日には、早くも井上は潘から詩を贈られ、以後、『懐中雑記』には潘・関だけでなく陶渠林・姚文棟の詩とそれらに次韻した井上の詩が写されている。また前述のカイザーパノラマのチラシがはさみこまれていたノートには、関桂林の詩一篇が写され、別紙二枚に書かれた潘飛声の詩二篇がはさまれている。この三篇の詩はいずれも「懐中雑記」には記されていない。

関・潘の二人は井上だけでなく前述の石黒忠恵や森林太郎とも交際があった。「石黒日記」一八八八年六月九日条に「朝潘飛声及関桂林ヲ訪フテ別ヲ告ク詩ヲ書シテ別」とあり、「日記」には登場しない

ものの以前から知り合いであったことがわかる。これに続いて石黒は「中食森二逢フ森曰昨潘飛声及関桂林二逢フタリト今朝両氏説及森有故也」と記し、森も顔知りであったことがわかるのである。『独逸日記』が一八八八年五月一四日で終わっているためか、森は彼らのことは書いていない。彼らが井上・石黒・森ら日本人と交際を持ったのは偶然ではない。関桂林はかつて日本に滞在したことがあり、日本とは親しい位置にあったのである。

一八七三年八月、開成学校から分離独立した東京外国語学校は、外務省設立の語学所と合併して成立したが、関桂林はここで一八八二年五月―一八八四年七月、清語教師をつとめていた。また『東京外国語学校沿革』によると一八八二年一月二一日、姚文棟が清国公使館員として同校を視察に訪れている。姚も期間はわからないが日本に滞在していたのである。ちなみに一八八三年建碑と考えられる東京向島の三田神社の「蒙恬碑」、この碑の「貴名録」にも姚文棟の名前がみえる。いっぽう潘飛声は一八九一年〓光緒一七年、『説劍堂集』二冊を刊行し、同書は「懷中雜記」と同様、都立中央図書館井上文庫に収蔵されている。『説劍堂集』の冒頭には井上の題字「海山書」と序が掲げられている。井上文庫本は潘から井上に贈られたものである。

帰国を目前に控えた一八九〇年七月二十九日、井上は陶渠林に「支那公使館」に招かれ、張・姚・廣・桂・潘らと別れの宴をほった。そしてベルリンを出発する八月八日、見送の人の中には日本人や東洋語学校生徒に混って姚・潘の姿があった。井上はヨーロッパから

の帰途も関・潘と同行し、一〇月六日香港で別れている。彼らとの別れが井上の留学の終りであった。

表1 井上留学期間(1884.4.2-1890.8.8) 交際日本人名

氏名	「懐中雑記」記載箇所	備考
青山(胤道)	M20. 5.14	
朝比奈 知 泉	M19. 3.13, M19. 3.28, M19. 3.30, M19. 9.13, M19.12.22, M19.12.31, M20. 1. 9, M20. 5.27, M20.10.10, M20.11.12, M21. 6. 1, M21. 9.25, M21.10. 2, M22. 3.13, M22. 7. 3	
姉小路 公 義	M21. 1. 4, M21. 1.10	
有 森	M23. 8. 7, M23. 8. 8	
有 賀 長 雄	M20. 3. 9, M20. 3.23, M20. 8. 7, M20. 8.23, M20. 9.11, M20. 9.18, M20. 9.25, M20.10.13, M21. 3. 1	
飯 田 旗 郎	M23. 5. 2, M23. 5.28	号 旗軒
飯 盛 挺 造	M21. 9.28	
石 黒 忠 憲	M21. 5. 9	
石 田(英 吉)	M20. 7. 6, M20.12.14, M20.12.21, M21. 1. 3, M21. 8.13, M21. 8.16, M21. 8.17	石黒忠憲日記 M21.1.3の石田議官か
伊 勢 時 雄	M22.12. 2, M22.12.24, M23. 1. 1	横井時雄の別名
一ノ瀬(勇三郎)	M20.12.21	
稲 垣 満 次 郎	M20. 7. 6, M20. 7.16, M21. 8.10	
井 上 円 了	M20. 5.13, M20. 5.22, M21. 5.24, M21. 5.28, M21. 5.31, M21. 8.12, M21. 8.16, M21. 8.17, M21.10.20, M21.12.17, M22. 3.19, M22. 4.13, M22. 4.16, M22. 4.24, M22. 5. 2, M22. 6.29, M22. 7. 2, M22. 7.27, M22.11.15, M23. 2. 5, M23. 3. 5, M23. 8. 4	
岩 下(清 周)	M20. 8.28	
上 田	M21. 7. 6	万年か
内 田 周 平	M21. 9.27	
宇 野 作 弥	M18. 6.17	
遠 藤	M23. 4.13	
大 石 正 巳	M20. 7. 9	
大 島 貞 恭	M23. 4.13, M23. 6.18, M23. 7.24	
太 田 稲 造	M22. 6. 9	
太 田(徳三郎)	M19. 9.30	
太 田	M23. 2.28	徳三郎にあらず、稲造か
大海原	M20.12.21	
大 森 鍾 一	M19. 5. 1, M20. 3. 9	
小柳津 要 人	M22. 7.27	
岡 倉 覚 三	M20. 5.18, M20. 5.22	
岡 本	M21.12.14, M22. 4. 3	
海江田 信 義	M20. 7. 1, M20. 7. 4, M21. 3. 1	
樫 村 清 徳	M18.10. 1	
加 藤 濟	M20. 6. 4, M20. 7. 4, M20.10.13	
加 藤	M22. 9.23	時次郎、栄吉、泰久のいずれか

氏名	「懐中雑記」記載箇所	備考
加藤	M23. 8. 5	前記加藤とは別人か
金井 延	M19. 8. -, M21. 3. 1, M21.12.15, M22. 7.29, M22.10.12	
金子 堅太郎	M19.2.中旬, M22.10.17, M22.10.24, M22.10.26, M22.11.26, M22.12. 3, M23. 1.18	
嘉納(治五郎)	M23. 2. 3, M23. 3. 1, M23. 4.17, M23. 7.26	
川口 武定	M23. 4. 7, M23. 4.13, M23. 4.17	
閑院宮 載仁	M20. 7.10	
木内	M22.12. 3	
菊川	M21.12.24	
菊池 大麓	M18. 4. -	
木村	M23. 1.18	
久鬼 隆一	M20. 4.15	
久保田(讓)	M23. 1.18, M23. 3. 1, M23. 3. 6, M23. 3. 9, M23. 3.21, M23. 4. 8, M23. 4.11, M23. 4.22, M23. 4.26, M23. 6. 8, M23. 8. 8	
黒田 長成	M20. 7. 4, M20. 8. 5, M20. 8.13, M21. 8. 7, M21. 8.18, M21. 8.25, M21. 9.18, M21. 9.25, M22. 5.15, M22.12. 3, M23. 4. 1, M23. 4. 2	
甲賀(宣政)	M20. 7.24	
木場 貞長	M19. 1. -	
小牧 昌業	M19.10.23	
小松原 英太郎	M20. 2.16	
西園寺 公望	M20.12.10, M21. 1. 4, M22.11.30, M22.12.31, M23. 3.28, M23. 5.31	
斎藤 修一郎	M20. 7. 9, M21. 8. 4, M23. 2.28	
榊	M18.10. 1	順次郎もしくは榎
坂田	M18.10. 1	「独逸日記」の佐方潜造か
品川 弥二郎	M19.10.24, M19.12.27	
篠田	M23. 8. 3	
斯波 淳六郎	M20.11.19	
荘田	M22. 8. 3	
末延 道成	M22. 8. 2, M22. 8. 3	交詢社、時事新報関係者?
図師崎	M23. 3. 8. M23. 3. 9	
鈴木(大亮)	M19.10.30	
関 直彦	M20. 4.29, M21. 4.24	
千賀 鶴太郎	M19. 5.27, M20. 2.16, M20. 2.21, M20.12.17, M21. 5.13, M21. 7. 5, M21. 9.26, M21.10.20, M22. 9.29, M23. 1. 1, M23. 4. 1, M23. 7.26, M23. 8. 5, M23. 8. 6, M23. 8. 8	
千本(福隆)	M20. 5.13, M20. 8.22, M20. 9.19	
高橋 達	M20. 9. 3, M21. 8. 7, M21. 8.12, M21. 8.18, M21. 8.25, M21. 9.18, M21. 9.26	

氏名	「懐中雑記」記載箇所	備考
高橋健三	M23. 4.17, M23. 5. 2, M23. 5. 6	
高橋茂	M20. 8.13, M20.12.11, M20.12.21, M21. 1.23	
多胡実敏	M21. 5.13, M21.11.18, M23. 3.24, M23. 4. 1	
田島	M20.10.13, M20.10.21	
田中稲城	M21.12.15, M22. 4. 7, M22. 9.24, M23. 2.15, M23. 2.23	
田中館愛橋	M23. 7.26, M23. 8. 2, M23. 8. 8	
棚橋軍次	M21. 9. 9	
田辺(朔郎)	M22. 2.17	
谷干城	M19.11. 3, M19.11. 4, M19.11.10, M19.11.18, M20. 4.11, M20. 4.14	
団琢磨	M21. 2.29	
千頭(清臣)	M20.12.14, M20.12.21, M21. 1. 3	
都筑馨六	M23. 7.17	
津田(静一)	M20. 7.16	
坪井(九馬三)	M20. 9. 8, M20. 9.30, M21. 3.19, M21. 7.26, M22. 4. 3	
鶴田	M20. 3.28	
寺田弘	M19.10.23, M19.10.25, M19.10.30, M20. 1.22, M20. 2.13, M21. 9.29, M22. 7. 2, M23. 1.18, M23. 3. 1, M23. 3. 9, M23. 3.21	号望南
東条(英教)	M22. 4. 7, M22.10. 8	
戸田氏共	M21. 9. 7, M21. 9. 9	
外山正一	M19. 3.30, M22. 7.2, M22.12. 5	
鳥尾小弥太	M19. 9.29, M19. 9.30, M19.10. 1, M19.10. 2, M19.10. 3, M19.10. 4	
中島力造	M22.10.12, M22.12.24, M23. 1. 3, M23. 1. 5, M23. 1.11	
南条文雄	M21. 9.28	
二宮	M23. 8. 8	
野尻(精一)	M21. 3.19, M21. 7.26, M21. 9.25, M23. 3.13	
萩原(三圭)	M18.10. 1	
長谷川(為治)	M20. 7.24	
浜尾新	M18. 4. 7, M19. 2.23, M19. 4. 3, M19. 5. 1, M19.5.初め, M19.6.初旬, M19. 6.18, M19. 6.20, M19. 6.24, M20. 5. 8, M20. 5.13, M20. 5.16, M21. 6.29	
林定浩	M22. 4. 1	
原敬	M20. 6.10, M20. 7. 9, M20. 9.24, M20.10.13	
原(亮一郎)	M22. 2.17	
原田	M20. 3.28	貞介、直次郎、宗介のいずれか
日高(真実)	M22.12.24, M22.12.31, M23. 1.18, M23. 3. 1, M23. 3. 5, M23. 7.26, M23. 8. 5, M23. 8. 8	
土方	M20. 9.8, M21. 8.19, M21. 8.20	寧、久明のいずれか
福島	M23. 4.13	

氏名	「楼中雜記」記載箇所	備考
福 富 孝 季	M21. 1. 8, M21. 1.11, M21. 1.23	
藤 枝 (沢 通)	M20. 8.20	
藤 島 了 程	M20. 6. 3, M20. 7.24, M20. 7.28, M20. 7.31, M20. 9. 3, M20. 9.15, M20. 9.18, M20. 9.26, M20.10.21, M20.11.26, M20.12.21, M21. 4.18, M21. 6. 3, M21. 6. 5, M21. 6.15, M21. 8.26, M22. 4.13, M22. 4.16, M22. 4.24, M22. 5. 2	
藤 田 茂 吉	M22. 8. 3, M22. 8. 4	
星 亨	M22.11.30	
松 井 (武太郎)	M20. 9.26	
丸 山 作 楽	M20. 6.19, M20. 7. 1, M20. 7. 4, M20. 7.10, M21. 3.17, M21.10.19	
箕 作 麟 祥	M20. 1. 9	
宮 川	M20.10.13	
三 宅 秀	M19. 5. 1, M19. 6.19, M19. 6.24, M19.10.23	
宮 崎 道三郎	M20.11.30, M21. 9. 1	
三 好 退 三	M20. 7.15, M22. 3.30, M22. 4.14, M22. 7.25, M22. 8. 1, M22. 8.31, M22. 9.24, M22.10. 1, M22.10. 5, M22.10.24, M22.10.26, M22.12.24, M22.12.31, M23. 3.12, M23. 5. 6, M23. 5.18, M23. 8. 1, M23. 8. 7, M23. 8. 8	
村 岡	M23. 4. 5	
元 田 肇	M19. 4. 1	
森 林太郎	M19.10. 7	
八 代	M21. 2.21, M21. 2.28	
柳 沢	M21. 7. 6	
山 県 有 朋	M22. 4.14	
湯 本	M23. 8. 3	
吉 川	M23. 8. 8	キツカワか
芳 川	M23. 8. 5	
和 田 維四郎	M18.6.初旬, M21. 9.28	
渡 辺 洪 基	M22. 7. 2	
渡 辺 昇	M20.12.13, M21. 5.19, M21. 9.15	

注) 1. カッコ内の名前は、富田仁編『海を越えた日本人名事典』(日外アソシエーツ 1985年)、『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房 1992年)等によって推定したものである。

2. 交際とは実際に出会ったもののほか、書翰のやりとりも含む。表3も同じ。



表2 井上留学中の娯楽

種 類	年月日	都 市	会 場	演 目	参 考
芝 居・オペラ	M18. 9.30	フランクフルト			『東洋学芸雑誌』54号
	M18.12.12	ライブツィヒ	クリスタルバラースト	アリオン会	''
	M18.12 頃	''	ノイエステアトル	「ウィリアム・テル」	''
	M19. 3.10	''		ワーグナー「ローエン格林」	
	M19. 3.19	''	ノイエステアトル	「フライシェッツ」	
	M19. 3.23	''		「ファウスト」	
	M19. 5. 1	ベルリン	ドイチェステアトル	「ナタン」	
	M19.10. 7	ミュンヘン		「餐董者」	『独逸日記』
	M19.10.10	ドレスデン			
	M20. 8.22	パ リ	エ デ ン 劇 場		
	M20.11.17	ベルリン		「ミカド」	
	M21. 2. 8	''	ヴィクトリア劇場		
	M21. 4. 4	''	オペラハウス	「アイーダ」	
	M21. 4.20	''			
	M21. 9. 4	ミュンヘン		ワーグナー「フェーン」	
	M21. 9.13	ドレスデン		スクリーブ作曲	
	M22. 1. 1	ベルリン	ヴィクトリア劇場	「アリ・ババ」	
	M22. 4. 2	''		「ワッフェン・シュミット」	
M22. 5.19	''				
ヴァイオリン演奏	M18.12.10	ライブツィヒ		演奏者サラサーテ	『東洋学芸雑誌』54号
	M19. 3.21	''	ゲヴァントハウス	演奏者アントン・ルビンシュタイン	
歌 曲	M22. 3.27	ベルリン	コンチェルトハウス	歌唱者アイテル婦人	
舞 曲	M21. 9.15	ベルリン		サルパナル	
幻 術	M18.10. 4	ライブツィヒ		メリニー氏	『東洋学芸雑誌』38号
	M21. 4.18	ベルリン		コンコルヂャ	
パノプテウム	M17. 4~8	ベルリン		ソクラテス、カント、ダーウィン、 フリードリヒ大王、ガムベック、 グレヴィー、ビスマルク、レッシング、 シレル、ゲーテ、フムボルト、 ヴォルテール	『東洋学芸雑誌』38号
	M20.11.19	''			
	M20.11.27	''			
	M21. 8.20	ロンドン	マダム・タッソー		
パノラマ	M20.11. 6	ベルリン	カイザー・パノラマ		
	M21.10. 1	''		ローマ梵焼図	
水 晶 宮	M21. 8.22	ロンドン			
-	M18.10. 4	ライブツィヒ	クリスタル・バラースト		『東洋学芸雑誌』54号
-	M22. 2.24	ベルリン	ライヒスハレ		

表3 井上留学期間(1884.4.2-1890.8.8) 交際清国人名

氏名	「懷中雜記」記載箇所
林 振 峯	M2. 6.25
姚 文 棟	M21. 4.29, M21. 6. 3, M21. 6.10, M21. 7. 1, M21. 7.11, M21.10. 3, M21.10. 7, M22. 9.29, M23. 7.29, M23. 8. 2, M23. 8. 8
姚 子 梁	M21. 7.21
桂 秋 澧	M21. 5.14
陶 渠 林	M21. 6.10, M21. 7.11, M21. 7.21, M21. 9.28, M22. 9.29, M22.10. 3, M23. 4. 4, M23. 7.29, M23. 8. 2
張 德 彝	M22. 9.29, M23. 7.29
葛 祿 伯	M20.11.13, M21. 5.14
閔 桂 林	M20.10.22, M20.11.13, M20.11.27, M20.12. 4, M20.12.11, M21. 1. 2, M21. 4.29, M21. 5.31, M21. 7. 8, M21.11.11, M22. 1. 1, M22. 4.24, M22. 9.29, M22.10. 3, M23. 3.14, M23. 7.26, M23. 7.29, M23. 8. 6
潘 飛 声 (潘 蘭 史)	M20.10.22, M20.11. 3, M20.11.13, M20.11.27, M20.11.28, M20.11.30, M20.12. 4, M20.12.11, M21. 1. 2, M21. 4. 1, M21. 4.26, M21. 4.29, M21. 5.31, M21. 7. 8, M21. 7.21, M21. 9.16, M21. 9.24, M21.11. 4, M21.11.11, M22. 1. 2, M22. 4. 4, M22. 4.24, M22.5.初旬, M22. 9.29, M22.10. 3, M23. 3.14, M23. 4. 1, M23. 5.25, M23. 6.18, M23. 7.26, M23. 7.29, M23. 8. 6, M23. 8. 8
潘 光 瀛	M21. 7. 1
陳 其 鏞	M21. 6. 3
廣 音 恭	M21.10. 3, M21.10. 7, M23. 7.29, M23. 8. 2
楊 椒 坪	M23. 2. 4
張	M21. 7. 8
閔	M21. 7. 8
承 厚	M21. 6. 3, M21. 7.11
禹 山	M21. 7. 1

注) 潘 飛声=潘 蘭史は『説劍堂集』によって同定した。

(註)

- (1) 関卓作編『井上博士と基督教徒 一名「教育と宗教の衝突」 顛末及評論 正・続』みすずリプリント16月報 みすず書房 一九八八年。
- (2) 東京大学百年史編集室 一九七七年 酒井豊執筆。
- (3) 井上哲二郎『井上哲次郎自伝』富山房 一九七三年。巽軒会『青桐集』大倉広文堂 一九三三年。昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究 業書54(井上哲次郎)』一九八三年。
- (4) 学海日録研究会『学海日録』第五卷 岩波書店 一九九二年。
- (5) 長谷川泉『蘭外文学と「独逸紀行」』明治書院 一九八五年。
- (6) ミルマンについては鈴木良『西園寺公望とフランス』(後藤靖編『近代日本社会と思想』吉川弘文館 一九九二年)参照。
- (7) たとえば『原敬日記』I(原奎一郎編 福村出版 一九八一年)一八八五年二月九日条に「仏国に來り仏語の必要益々多きにより、日本人に多く教授し來るアルカンポーArcambeauなる者を毎日語学教授に來る事を約す」とある。
- (8) 『蘭外全集』第三五卷 岩波書店 一九七五年。
- (9) 東京大学法学部近代立法過程研究会『近代立法過程研究会収集資料紹介(一〇) 大森鐘一關係文書(7)』(『国家学会雑誌』第八五卷五・六号一九・一〇号)。
- (10) 前掲『原敬日記』1。原敬關係文書研究会編『原敬關係文書』第五卷 日本放送出版協会 一九八六年。なお『原敬日記』Iには四月一七日条の記事はなく、六月九日条も「大石正巳、井上哲次郎等來遊中に付晚餐に招く」と書かれている。
- (11) 『石黒忠憲日記抄(一)』(『前掲『蘭外全集』月報36』38 一九七五年三月・四月・六月)。また同日記の解説、竹盛天雄「不四文庫蔵石黒忠憲日記について」が『蘭外全集』月報35(一九七五年一月)にある。

- (12) 立命館大学編『西園寺公望伝』第一卷 岩波書店 一九九〇年。
- (13) 『世界之日本』と陸奥・西園寺・竹越の關係については拙稿、雑誌『世界之日本』復刻版第一卷「解題」を参照されたい。
- (14) 木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』平凡社 一九九三年。東京都江戸東京博物館編『博覧都市 江戸東京』展図録 一九九三年。
- (15) 同前。
- (16) R・D・オールティック 小池慈監訳『ロンドンの見世物』I 国書刊行会 一九八九年。
- (17) 『東洋学会雑誌』第三号 一八八八年一月二〇日。ちなみに井上の担当は「日本学」と「日本語演習」である。同誌には第二号・第四号・第七号にも東洋語学校關係の記事がある。
- (18) 東京外国語学校編『東京外国語学校沿革』一九三二年。
- (19) 楽之軒生「蒙恬の碑」(『画説』一九四〇年四月号 東京美術研究所復刻版 国書刊行会 一九七七年)。

(ふくい じゅんこ 立命館大学西園寺公望史編纂室)